

張之洞『輶軒語』訳註（一）

坂本具償

財木美樹

輶軒語は、光緒元年（一八七五）、張之洞が三十八歳、提督四川学政の時に院試の受験者や合格者のために執筆したものである。いかにすれば紳士となれるか、いかにすれば経史子に通じることができるか、いかにすれば考試に合格できるか、といったことが簡潔に記述されている。本稿では『輶軒語』の序目、および語學第二のうちの「通經」「讀史」「讀諸子」「讀古人文集」の訳注を収める。

キーワード

序目 通經 讀史 讀諸子 讀古人文集

※1 香川高等専門学校高松キャンパス一般教育科

※2 比治山大学非常勤講師

張之洞『輜軒語』訳註(一)

坂本具愷
財木美樹

はじめに

大学時代は右も左もわからず、授業内容もはじめてのことばかりで、覚えているというほうが罕であるが、某教授の二つの言葉は今でも耳朶の奥に残っている。曰く、「廃品回収車から慶長古活字版の『孟子』を見つけたことがある」、曰く、『輜軒語』を読め」と。教授が道山に帰して久しいが、あの慶長古活字版『孟子』はとうなつたのであろうか。

数年前、坂本、財木と、小路口聡氏(現東洋大学教授)、玉木尚之氏(現高知大学教授)の四人で、読書会を開こうという話があった時に、『輜軒語』をその候補のひとつに挙げたのは、この言葉が脳裏にあったからである。

それぞれ分担を決めて取りかかったが、四者の環境が全く異なる上に、それぞれ多忙でなかなか時間がとれなくなり、一堂に会することもなく、原稿をファイルで一度送りあっただけで、中断していた。

坂本と財木は、『春秋繁露』の訳注にも取り組んでいたが、昨年、一通りの完成を見た。とはいえ、今後修正しなければならない点も多く、順次補正していく予定である。そこでとりあえず『春秋繁露』の訳注が一段落したことを機に、中断していた『輜軒語』の訳註の完成を目指すことにした。本稿はその(一)であり、メンバーは坂本、財木の二名である。誤読、誤訳、不明、未熟などところも多々あると思われるので、博雅の士の指教を乞う次第である。

張之洞について

張之洞(一八三七―一九〇九)、字は孝達、あるいは香濤、諡は文襄。直隸河間府南皮県(現在の河北省交河県)の人。十六歳で郷試に合格、同治二年二十七歳で進士となる。翰林院編修、浙江鄉試副考官、湖北学政、四川学政、国子監司業を歴任。光緒六年四十四歳の時侍講学士、その後内閣学士、山西巡撫となり、光緒十年四十八歳の時兩広総督となった。

『輜軒語』は光緒元年(一八七五)、張之洞が三十八歳、提督四川学政の時に院試の受験者や合格者のために執筆したものであり、その内容は、いかにすれば紳士となれるか、いかにすれば經史子に通じることが出来るか、いかにすれば考試に合格できるか、といったことを簡潔に述べている。同年、彼は經史子集の著者および刻本の有無、善惡を記した『書目答問』①を出版した。この兩書は総論と各論のような關係を有し、出版後いくばくもせずに兩書の合刻本があらわれ、「家ごとに一編を置く」といわれるほどのベストセラーとなった。

張之洞には後年、光緒二十四年に『勸學篇』という著作があり、当時の政界や学会に大きな影響を与えた。これにはすでに訳注として『勸學篇』(濱久雄・那智安敬、中国古典新書続編29、明德出版社、二〇〇六)がある。その解説の「張之洞とその時代背景、『勸學篇』の成立」は『輜軒語』を読むにあたってもとても参考になる。

『經解入門』について②

『輜軒語』には『經解入門』を引用流用しているところが散見する。『經解入門』は江藩(一七六二―一八三二)の著作である。江藩、字は子屏、鄭堂と号する。江蘇省甘泉の人。他に『漢學師承記』『宋學淵源記』『周易述補』『小雅小箋』などの著がある。『經解入門』八巻は科挙の受験者のために經書に関する基本的な常識と勉強方法を述べたものである。宮崎市定氏が「初學に對する入門という名であるが、實は入門者に必要な範圍を超えて、著者自身の博識を誇るための本である。それだけならよいが、更に第三の目的として、淺學者を恫喝する意圖があったと思われる。

舊中國においてはいつもこうして先輩の教師が、後生を威壓して、その自由研究の意志を萎縮させるに懸命であったのである」『論語の新研究』頁七三〜七四、一九七四』というように、初心者にはかなり難しい、専門的な内容を含んでいる。『輜軒語』は『經解入門』から引用流用しはするが、院試の受験者、合格者を対象としているので、『經解入門』にくらべてより初歩的な内容となっている。本訳注では『輜軒語』が『經解入門』のどの部分を引用流用しているかを明示することにより、『輜軒語』と『經解入門』の関係を明らかにしたい。

【註】

① 当時張之洞の幕下にあった繆荃孫が張之洞の死後、『書目答問』は自分の代撰であると主張した。ただ掠美であるという反論もあり、現在でも議論がある。

② 『經解入門』が江藩の手筆ではなく、他人の偽託であるとする説がある。司馬朝軍『文獻辨偽學研究』第七章『經解入門』真偽考（武漢大學出版社、二〇〇八）参照。

凡例

一、本訳注は張之洞『輜軒語』に対して訳註を施そうとするものである。本稿では、『輜軒語』の序目、および語學第二のうちの「通經」「讀史」「讀諸子」「讀古人文集」の訳注を収める。

一、本訳注は『慎始基齋叢書』所収の『輜軒語』を底本とし、原文と【書き下し】【註】【通釈】【書目答問】から成る。原文の夾注は小字雙行であるが、今回はポイントを下げた活字とする。

一、【書目答問】は、本文に言及された書籍、人物に関する著作を『書目答問』から引用したものである。『書目答問』に掲載されていないが、『補正』（范希曾編）にあるものは【補正】として引用する。

一、原文と【書き下し】は原則として旧字体を使用し、【通釈】は固有名詞（人名、

書名）には旧字体を使用する。

一、『經解入門』は京都弘文堂排印本（一九三〇年）を定本とし、頭注や勘誤などで文字を改めたところがある。また随時、周春健の校注本（華東師範大學出版社、二〇一〇）を参照した。

— 序目 —

輜軒語

律令、學政按試畢、集諸生於堂、行賞罰、申以董戒。名曰發落。使者行部之處、凡士習得失、文學利病、不惜竭知詳說。然漏刻有限、不能盡言。且子衿如林。到者不能共聞、聞者不能悉記。故舉當爲諸生言者、條分約說、筆之於書、以代喉舌、分爲三篇。上篇語行。中篇語學。下篇語文。其間頗甚淺近、閒及精深、緣質學非一。深者爲高材生勸勉、淺者爲學僮告戒。要皆審切時勢、分析條理、明白易行、不爲大言空論。稱心而談、一無勦說。使者嘗謂、蜀中士人、聰明解悟、擗善好勝、不膠己見、易於鼓動、遠勝他省。所望不以此言視爲規瑣、引伸觸長、異日成就、必有可觀。使者自惟資學不逾中人、益之荒落。豈謂一人之知、綜括無闕。特在官言官、誼無多讓云爾。光緒元年 月 日、提督四川學政侍讀翰林院編修南皮張之洞書。本名發落語。或稱其實。因取揚子雲書輜軒使者絕代語釋之義。謂與蜀使者有合。命曰輜軒語。

語行第一

語學第二

語文第三

學究語第四

敬避字第五

磨勘條例第六

勸置學田說第七

【書き下し】

『輜軒語』

『律令』に、「學政、按試し畢れば、諸生を堂に集め、賞罰を行ひ、申ぬるに董戒を以てす。名づけて發落と曰ふ」とあり。使者行部の處、凡そ士習の得失、文學の利病、竭知詳説するを惜します。然れども漏刻に限り有りて、盡くは言ふ能はず。且つ子衿は林の如し。到る者共に聞く能はず、聞く者悉くは記する能はず。故に當に諸生の爲に言ふべき者を擧げて、條分約説して、之を書に筆して、以て喉舌に代へ、分ちて三篇と爲す。上篇は語行。中篇は語學。下篇は語文。其の間頗る甚だ淺近なるも、閒ま精深に及ぶは、質學の一に非ざるに縁る。深き者は高材生の爲に勸勉し、淺き者は學僮の爲に告戒す。要するに皆時勢に審切にして、條理を分析し、明白にして行ひ易く、大言空論を爲さず。心に稱ひて談じ、一に勸説無し。使者皆に謂へらく、蜀中の士人、聰明解悟にして、善に擲ひ勝を好み、己が見に膠せず、鼓動し易きこと、遠く他省に勝れりと。望む所は此の言を以て視して規瑱と爲さず、引伸觸長し、異日成就し、必ず觀る可き有らんことなり。使者自ら惟ふ、資學は中人を逾へず、之に益して荒落す。豈に一人の知、綜括して闕無しと謂はんや。特だ官に在りて官を言ふ、誼、多讓無し云爾。光緒元年 月 日、提督四川學政侍讀銜翰林院編修、南皮の張之洞書す。本、『發落語』と名づく。或いは其の質なるを病む。因りて揚子雲書の『輜軒使者絶代語』の義を取り、蜀の使者と合する有るを謂ひ、命づけて『輜軒語』と曰ふ。

語行第一

語學第二

語文第三

學究語第四

敬避字第五

磨勘條例第六

勸置學田說第七

【註】

○『律令』 出典未詳。

○學政 「提督學政」の略で、「提學」ともよばれる。「院試」の試験責任者である。進士出身で、京堂官・翰林院侍読・中允・贊善・科道・部曹官の中から人品のすぐれた者をえらんで任命される。任期は三年で、天子から直接任命されて各省に赴任する。三年間の任期に間に、省内の府を二度視察にまわり、一度は歲試、一度は科試を行い、それぞれ院試をあわせて行う。「院試」は府の学校に入学して生員となるための最終試験で、数日に渡って四回実施される。學政・院試については、商衍璽『清代科舉考試述録』頁一〇一八（生活・讀書新知三聯書店、一九五八）、宮崎市定『科舉史』頁九三二（平凡社、東洋文庫、一九八七）、同『科舉—中国の試験地獄』頁四七五（中央公論社、中公文庫、一九八四）など参照。

【通釈】

『律令』に、「學政は、試験の日程がすべて終了すると、学生を（學政の）宿舍に集め、可否を発表し、訓戒を述べる。これを『發落』という」とある。（天子の）使者（の學政である私）は視察に訪れた地で、士大夫の氣質の得失や文學の利病について、労をおしまず詳しく解説するが、時間に限りがあつて、すべて述べつくすことはできない。なおかつ学生は林のごとく大勢集まる。集まった学生は同時に（私の話を）聞くことができず、聞いた学生もすべて憶えることはできない。そこで学生たちのために言っておくべき事柄をあげて、いくつかの項目にわけて要約し、書物として仕立て、喉舌のかわりにし、三篇にわけける。上篇は語行、中篇は語學、下篇は語文。内容は卑近なことはかりだが、ままた精深なことに言及するのは、（学生の）素質や學識が同じではないからである。（内容の）深奥な部分は才能のある者のためにはげましとし、（内容の）淺近な部分は、學童のために戒めとする。要するにいずれも時勢に密接に関係し、條理を分析し、はつきりして実行しやすく、

大言空論ではない。私の心になつたことだけを述べており、人からかすめとつた説はまったくくない。使者（である私）はいつも思つていた。四川の学生は聡明で、理解力にすぐれ、善に志し、負けず嫌いで、自分の意見にとらわれず、鼓舞されやすい。（この点については）はるかに他の省の学生よりまさっている。私の願ひは、この書だけを金科玉条とすることなく、さらに触発伸長し、他日大成して、立派な人物となつてもらうことである。使者（である私）は素質も学識も並をこえることはなく、ますます不勉強であると自覚している。どうして一人の知識があらゆることを網羅し、完全無欠でありえようか。ただ（現役の）官吏である私が官について述べているので、あまり謙遜することもないであらう。光緒元年（一八七五）月日、提督四川學政侍讀翰林院編修、南皮の張之洞書す。本書はもと『發落語』と名づけたが、直接すぎるのではないかというのになつた。そこで揚子雲の『翰軒使者絶代語』の意味からとつて、蜀の使者（である自分の立場）と一致することを考えあわせ、『翰軒語』と名づけた。

語行第一

語學第二

語文第三

學究語第四

敬避字第五

磨勘條例第六

勸置學田說第七

語學第二

爲學之道、豈勝條舉。根柢工夫、更非寥寥數行所能宣罄。此爲初學有志者約言之。乃階梯之階梯、門徑之門徑也。

【書き下し】

學を語る。第二

爲學の道は豈に條舉に勝へんや。根柢工夫は更に寥寥たる數行にて能く宣罄する所に非ず。此れ初學の志有る者の爲に之を約言す。乃ち階梯の階梯、門徑の門徑なり。

【通釈】

學を語る。第二

學問修得の方法はひとつひとつ簡条書きにして挙げられようか。（かといつて）本質的な方法をわずか數行で述べつくすことはできるものではない。この篇は學問に志す初學者のために要点を述べたものであり、階梯の階梯、門徑の門徑である。

一、通經（經に通ず）

讀經宜讀全本。

周禮、禮記、左傳、斷不可刪。卽魯鈍者、亦須買全本、就其上鉤乙選讀。日後尚可尋檢萬目。不然、終身不知此經有幾卷矣。

【書き下し】

經を讀むには宜しく全本を讀むべし。

『周禮』『禮記』『左傳』は斷じて刪す可からず。卽ひ魯鈍なる者も亦須らく全本を買ひ、其の上に就きて鉤乙選讀すべし。日後尚ほ尋檢萬目す可し。然らざれば、終身此の經に幾卷有るかを知らず。

【通釈】

經を讀むには全本（欠落がなく内容が完全な本）を讀まなければならない。

『周禮』『禮記』『左傳』は決して読み飛ばしてはならない。たとえ魯鈍なものでも全本を購入し、それに句読を切りながら通読しなければならない。さらに後日検索したり目を通したりしなければならない。さもないと一生この経が何巻あるのかわからない。

【書目答問】

・十三經注疏。共四百一十六卷。乾隆四年武英殿刻附考證本、同治十年廣州書局覆刻殿本、阮文達公元刻附校勘記本、明北監本、明毛晉汲古閣本。目列後。阮本最於學者有益、凡有關校勘處旁有一圈、依圈檢之、精妙全在於此。四川書坊翻刻阮本、謬誤太多、不可讀、且削去其圈、尤謬。明監、汲古本不善。

周禮注疏四十二卷、漢鄭玄注、唐賈公彥疏。

禮記正義六十三卷、漢鄭玄注、唐孔穎達正義。

春秋左傳正義六十卷、晉杜預集解、唐孔穎達正義。

— 2 —

經解宜先識字。下筆宜用今字、而讀古書必識古字。詩文宜用今韻、而讀古書必識古韻。語言筆札可用今義、而解古書必用古義。

此非余一人之私言。國朝諸老師之言也。字有形、形不一。一古文、二籀文、三小篆、四八分、五隸書、六眞書、相因遞變。字有聲、聲不一。有三代之音、有漢魏之音、有六朝至唐之音。字有義、義不一、有本義、有引伸義、有通借義。形聲不審、訓詁不明、豈知經典爲何語耶。如何而後能審定音義、必須識小篆、通說文、熟爾雅。五雅、玉篇、廣韻、並宜參究。俗師知其一、不知其二、知其末、不知其源。駒其臆說、止如臆語。此事甚不易、非繙檢字書便能通曉者也。說文初看無味、細看極有意趣。段玉裁注說文、精而較繁、可先看大徐本說文解字。說文字部、難於尋檢、毛韻說文檢字、黎永椿說文通檢、頗便初學。黎書較勝。

經傳元是篆書。古韻自有部分。識古篆之形、曉古語之聲、方能得古字之義。大率字類定於形、字義生於聲。知篆形則可覺今音之非。知古音則可訂今形之誤。故形聲爲識字之本。

【書き下し】

經を解するには宜しく先づ字を識るべし。筆を下すには宜しく今字を用ふべきも、古書を讀むには必ず古字を識る。詩文には宜しく今韻を用ふべきも、古書を讀むには必ず古韻を識る。語言筆札には今義を用ふ可きも、古書を解するには必ず古義を用ふ。

此れ余一人の私言に非ず。國朝の諸老師の言なり。字に形有るも、形は一ならず。一、古文、二、籀文、三、小篆、四、八分、五、隸書、六、眞書、相因りて遞ひに變ず。字に聲有るも、聲は一ならず。三代の音有り、漢魏の音有り、六朝より唐に至るの音有り。字に義有るも、義は一ならず。本義有り、引伸義有り、通借義有り。形・聲審らかならず、訓詁明らかなざれば、豈に經典何を語ると爲すかを知らんや。如何にして而る後に能く音義を審定するか。必ず須く小篆を識り、『說文』に通じ、『爾雅』に熟すべし。『五雅』『玉篇』『廣韻』は並びに宜しく參究すべし。俗師は其の一を知るも、其の二を知らず、其の末を知るも、其の源を知らず。其の臆說を講ずること、止だ臆語の如し。此の事甚だ易からず、字書を繙檢すれば便ち能く通曉する者に非ざるなり。『說文』初めて看れば味無し。細かく看れば極めて意趣有り。段玉裁注の『說文』は、精なれども較や繁。先づ大徐本の『說文解字』を看る可し。『說文』の字部は、尋檢に難し。毛韻の『說文檢字』、黎永椿の『說文通檢』は頗る初學に便なり。黎書較や勝る。

經傳は元是れ篆書。古韻自ら部分有り。古篆の形を識り、古語の聲に曉らかにし、方めて能く古字の義を得。大率字類は形に定まり、字義は聲に生ず。篆の形を知れば則ち今音の非を覺る可し。古音を知れば則ち今形の誤りを訂す可し。故に形・聲は字を識るの本と爲す。

【註】

○『五雅』 『爾雅』『小爾雅』『逸雅』『廣雅』『埤雅』の五つの字書をいう。

○この一段はほぼ江藩『經解入門』説經必先識文字第二十二から引用している。傍線部が『翰軒語』に引用された部分である（以下同じ）。

説文云、字華也。言其華生無盡也。字、古謂之文。字有形、形不一。一古文、二籀文、三小篆、四八分、五隸書、六楷書、相因遞變。字有聲、聲不一。有三代之音、有漢魏之音、有六朝至唐之音。詳音韻源流篇。字有義、義不一。有本義、有引伸義、即訓詁篇所言者。有通借義、即假借之訓。形聲不審、訓詁不明、豈知經傳所言者何物、所說者何事耶。且經傳原本篆書。古韻自有部分。識古篆之形、曉古語之聲、方能得古字之義。大率字類定於形、字義生於聲。知篆形方可審今音之非。知古音則可訂今形之誤。故形聲實爲識字之本。然則如之何而後能審定音義。曰、必須識小篆、通說文、熟爾雅。五雅玉篇廣韻、並宜參究。俗師知其一、不知其二、知其末、不知其源。聘其臆說、恍如臆語。此事甚不易、非精檢字書、便能通曉者也。又說文初看無味。細看極有意味。段玉裁注說文、精而較繁。可先看大徐本說文解字。

【通釈】

經を理解するにはまづ文字を覚えなければならない。文章を書くには現在使われている文字を用いてもよいが、古書を読むには古字を覚えなければならない。詩文には現在使われている韻を用いてもよいが、古書を読むには古韻を覚えなければならない。会話や文章には現在使われている意味を用いてもよいが、古書を理解するには古い時代の意味を用いなければならない。

これは私だけの意見ではない。清朝の先生がたがおっしゃっていることである。文字には形があるが、形はひとつではない。一、古文、二、籀文、三、小篆、四、八分、五、隸書、六、真書（楷書）というように順を追って変化した。文字には声があるが、声はひとつではない。三代の音があり、漢魏の音があり、六朝から唐にかけての音がある。文字には義（意味）があるが、義はひとつではない。本

義があり、引伸義があり、通借義がある。形や声が明らかでなく、訓詁がわからなければ、經典に何が書かれているのかわからうか。どのようにすれば音義を決定できるのか。小篆を覚え、『説文』に精通し、『爾雅』に習熟しなければならない。あわせて『五雅』『玉篇』『廣韻』を参照しなさい。凡庸な教師はひとつのことは知っているが、他のことはなにも知らず、枝葉末節のことは知っているが、本質的なことはなにも知らない。まるで寝言をとるようなかのように、臆説を滔々としてやべる。しかし事は容易ではなく、字書をひもとけばただちに精通できるというものではない。はじめに『説文解字』を読んだ時はまったくおもしろみにかける。しかし仔細に読むときわめて味わい深い。段玉裁の『説文解字注』はくわしいけれどもやや繁雑なので、まづ大徐本の『説文解字』を読みなさい。『説文解字』の部首は検索しにくい。毛韻の『説文檢字』、黎永椿の『説文通檢』が初手に便利である。黎永椿の本のほうがややすぐれている。經伝はもととも篆書で書かれていて、（篆書の）古韻がどの韻部に属するかはもちろんきまつている。そこで古い篆書の形を覚え、古語の音がわかつてはじめて古字の意味を理解することができ。そもそも文字の種類は形によって決定し、文字の意味は声から発生した。篆書の形がわかれば現在の音の誤りがわかり、古い音がわかれば現在の字形の誤りを訂正することができる。だから形と声は文字を覚えるための基礎である。

【書目答問】

- ・説文解字十五卷。漢許慎。宋徐鉉校定附字。平津館小字本、小學集函重刻孫本、汲古閣五次刪改大字本、朱校大字本即毛本、藤花樹額氏刻中字本、廣州新刻陳昌治編錄一篆一行本、蘇州浦氏重刻孫本。孫本最善、陳本最便。
- ・爾雅十卷。
- ・小爾雅疏八卷。舊題漢孔鮒。王煦疏。鑿翠山房本、非漢書藝文志元書。
- ・小爾雅訓纂六卷。宋翔鳳。浮溪精舍本。
- ・小爾雅義證十三卷。胡承珙。墨莊遺書本。錢東垣小爾雅校證二卷、未刊。

・廣雅疏證十卷。王念孫疏證。家刻本、學海堂本。
 ・博雅音十卷。魏張揖。隋曹憲音。高郵王氏刻本、明畢效欽原刻本、小學彙函校本。即廣雅。
 ・玉篇三十卷。梁顧野王元本。唐孫強增字、宋陳彭年等重修。澤存堂本、小學彙函重刻張本、鄧顯鶴重刻張本附札記、棟亨五種本、又明經廠大字本。
 ・廣韻五卷。隋陸法言切韻元本、唐孫愐宋陳彭年重修。澤存堂本、鄧顯鶴重刻張本、曹寅棟亨五種本、又明經廠大字本、小學彙函重刻張本明本兩本、張本較勝。
 ・說文解字段氏注三十卷。六書音韻表五卷。段玉裁。原刻本、蘇州重刻本、學海堂本、武昌局本附段氏汲古閣說文訂一卷。
 ・說文通檢十四卷。今人。同治十二年廣州新刻本、附說文後。此書爲翻檢說文而設、極便。毛模說文檢字二卷、止可檢汲古本、原刻重刻兩本、皆在成都。

3

讀經宜正音讀。論音韻源流。詳語文篇音韻押通韻條下。

古時、九州、語言不同。而誦詩讀書、同歸正讀。故太史公曰、言不雅馴、謬紳難言。班孟堅曰、讀應爾雅、古語可知。雅者正也。近世、一淆於方言、一誤於俗師、至於句讀離合、文義所繫、尤宜詳明。音讀雅正可據者、有唐陸德明經典釋文一書。其中皆采集魏晉南北朝諸家音釋。不同者並存之。各本經文不同者標出之。此可聽學者自視家法、擇善而從、總不出此書之外。即可爲有本之學。釋文舊有兩本。今武昌成都局刻、乃用廣校本翻雕。清晰可看。

經典釋文皆用反切。反切者何。反翻也。猶言翻譯也。反切之反、平聲、讀如平反之反。與翻同字。通鑑注資。即書作翻。宋人有翻譯名義集。切急也。唐人忌反字、改稱切。反者一字翻成兩聲。切者兩字合成一聲。其實一也。緩讀則是反切之兩字、急讀便成所求之一音。如經傳所載、不可爲回、之乎爲諸、奈何爲那、勃鞞爲披、邾婁爲鄒、終葵爲椎、鞠窮爲苛、不律爲筆、須封爲松。三代語如此者、不可毛舉。魏孫炎因創爲反

語之法、以兩字定一音、爲直音一字易差、字下注音某者、名直音。一形容有寫讀。一聲亦恐小變。反切兩音難提也。有兩字互相參檢。不至兩字形發。一時俱誤也。反切之義、不過如此。法甚簡、理甚淺。婦孺可曉。初製反切之時、不過取其合聲。就此兩字推測之、則上一字必同母、下一字必同韻。此乃自然之理、不勞求索而自合。乃宋以後人、不信古經、而好佛書、遂以爲反切字紐出於西域、牽合華嚴字母。等攝煩碎、令人迷罔。宋人始以唐僧神珙反紐圖、附玉篇後。等韻亦宋人作。其實與三代秦漢六朝以來之聲韻、絲毫無關。夫經字須用反切者、所以教不識字之童子也。如後世紐弄等韻之說、文士老儒、且多督惑。古人何苦造此難事、以困童蒙哉。辨字母之非古。詳嚴震東原集。因近世學人、每每以反切爲微渺難窮之事。故爲淺說之。或將反切兩音合讀之、而不能得聲者、不曉古音故耳。如字字許庚反、古讀許如許也。長幼之長丁丈反、射中之中丁仲反、古讀丁如爭也。德行之行下孟反、古讀下爲許。讀去爲去聲、讀行爲杭去聲也。霸王之王于況反、古讀于如汚也。殷鑒之監工暫反、古讀監如淨也。娶私列反、古讀私如舉也。

經傳中語、同此一字、而區分平仄、音讀多門、以致韻書數部並收。異同之辨、相去杪忽。此皆六朝時學究、不達本原、不詳通變者所爲。本原者形聲、通變者轉注借換之六書之義、實多難通。故顏氏家訓、已發其端。經典釋文敘錄、頗治其失。近代通儒、糾擿尤備。特初學臨誦、不示區分、將各聘方言、無從盡一。且義隨音別、解識記也。爲易。律體詩賦一出、更難通融。此乃因時制宜之道。又同此一字、或小有形變、而解詁殊殊、點畫無差、而訓釋各別。訓因師異、事隨訓改、各尊所受、歧說滋多。然正賴此經本文異讀異義、參差抵牾、得以鉤考古義。學者博通以後、於音義兩端、窺見本原、自曉通借。先知其分、而後知其合。不可躐等也。此薩維是約說。頗有深味。小學家字書韻書、大指要具。通材詳焉。

【書き下し】

經を讀むには宜しく音讀を正すべし。音韻の源流を論ずるは、語文篇の「音韻押通韻」の條下に詳らかなり。

古時、九州、語言同じからず。而して『詩』を誦し、『書』を讀むは、同じく正

讀に歸す。故に太史公曰く、「言、雅馴ならざれば、藹紳は言ひ難し」と。班孟堅曰く、「讀、爾雅に應ずれば、古語も知る可し」と。「雅」は正なり。近世、一は方音に清じ、一は俗師に誤られ、句讀離合するに至る。文義の繋る所は、尤も宜しく講明すべし。音讀の雅正にして据る可き者に、唐の陸德明の『經典釋文』の一書有り。其の中には皆魏晉南北朝諸家の音釋を采集す。同じからざる者は並びに之を存す。各本の經文の同じからざる者は之を標出す。此れ學ぶ者自ら家法に視て、善を擇んで從ふを聽す可きは、總て此の書の外に出でず。即ち本有るの學と爲す可し。『釋文』には舊兩本有り。今武昌の成都局刻は、乃ち盧校本を用ひて翻離す。清朗看る可し。

『經典釋文』は皆反切を用ふ。「反切」とは何ぞや。「反」は翻なり。猶ほ翻譯と言ふがごときなり。「反切」の「反」は平聲、讀むこと「平反」の「反」の如し。「翻」と同字。『通鑑』音を注するに、即ち查して「翻」に作る。宋人に「翻釋名義集」有り。「切」は急なり。唐人は「反」字を忌み、改めて「切」と稱す。「反」とは一字翻して兩聲を成す。「切」とは兩字合して一聲を成す。其の實一なり。緩く讀めば則ち是れ反切の兩字、急いで讀めば便ち求むる所の一音を成す。如へば經傳に載する所「不可」を「巨」と爲し、「之乎」を「諸」と爲し、「奈何」を「那」と爲し、「勃鞞」を「披」と爲し、「邾婁」を「鄒」と爲し、「終葵」を「椎」と爲し、「鞠窮」を「苟」と爲し、「不律」を「筆」と爲し、「須矜」を「菰」と爲す。三代の語の此の如き者は、毛舉す可からず。魏の孫炎、因りて創めて反語の法を爲り、兩字を以て一音を定むるは、直音の一字は差ひ易く、字の下に「音某」と注する者を直音と名づく。一形は容しく寫録有るべし。一聲も亦小變するを容る。反切の兩音は拊じ難きが爲なり。兩字互いに相參檢すれば、兩字の形聲、一時に俱に誤るに至らざる事有るなり。反切の義は此の如きに過ぎず。法甚だ簡にして、理甚だ淺し。婦孺も曉らかなる可し。初めて反切を製するの時、其の合聲を取るに過ぎず。此の兩字に就きて之を推測すれば、則ち上の一字は必ず同母、下の一字は必ず同韻なり。此れ乃ち自然の理にして、求索を勞せずして自ら合す。乃ち宋以後の人は古經を信ぜずして、佛書を好み、遂に以て反切の字紐は西域に出づと爲し、華嚴の

字母に牽合す。等攝煩碎にして、人をして迷罔せしむ。宋人始めて唐僧の神珙の『反紐圖』を以て『玉篇』の後に附す。等韻も亦宋人の作なり。其の實、三代秦漢六朝以來の聲韻と絲毫も關する無し。夫れ經の字に須らく反切を用ふべき者は、字を識らざるの童子に教ふる所以なり。後世の紐弄等韻の説の如きは、文士老儒すら且つ多く督惑す。古人何ぞ苦しんで此の難事を造りて、以て童蒙を困しめんや。字母の古に非ざるを辨するは、戴震の『東原集』に詳らかなり。近世の學人は、毎毎反切を以て微眇にして窮め難きの事と爲すに因る。故に爲に之を淺説す。或いは反切の兩音を將て合せて之を讀めども、聲を得る能はざる者は、古音に曉らかならざるが故のみ。如へば「亨」字は許庚の反、古「許」を讀むこと「許」の如きなり。「長幼」の「長」は丁丈の反、古「下」を讀んで「許」の反、古「丁」を讀むこと「爭」の如きなり。「德行」の「行」は下孟の反、古「中」は丁仲と爲し、「孟」を讀んで「芒」去聲と爲し、「行」を讀んで「杭」去聲と爲すなり。「霸王」の「王」は于況の反、古「于」を讀むこと「汚」の如きなり。「殷監」の「監」は工暫の反、古「監」を讀むこと「淫」の如きなり。「聖」は私列の反、古「私」を讀むこと「犀」の如きなり。

經傳中の語、同じく此れ一字なるも、平仄を區分し、音讀門多くして、以て韻書の数部に並びに收むるに致る。異同の辨、相去る事妙忽なり。此れ皆六朝時の學究の、本原に達せず、通變に詳らかならざる者の爲す所なり。「本原」とは形聲。「通變」とは轉注、假借、之を六書の義に揆せば、實は多く通じ難し。故に『顏氏家訓』已に其の端を發し、『經典釋文』敘録は頗る其の失に沿ふ。近代の通儒、糾擿尤も備はる。特だ初學諷誦するに、區分を示さざれば、將に各おの方言を聘して、畫一に従ふ無からんとす。且つ義、音に隨ひて別てば、解識肥なり。易きと爲す。律體詩賦一たび出づれば、更に通融し難し。此れ乃ち時に因りて宜を制するの道なり。又同じく此れ一字なるも、或いは小しく形變有りて、解詁遂に殊なり、點畫差無きも、訓釋各おの別つ。訓は師に因りて異なり、事は訓に隨ひて改まり、各おの受くる所を尊び、歧說滋いよ多し。然れども正に此の經、本、文を異にし、讀を異にし、義を異にし、參差抵牾するに賴りて、以て古義を鈎考するを得。學ぶ者博通して以後、音義兩端に於て本原を窺ひ見れば、自ら通借に曉らかなり。

先づ其の分を知りて、而る後に其の合を知る。等を離ゆ可からざるなり。此の二條は、是れ約説なりと雖も、頗る深説有り。小學家の字書韻書、大指客ほ具はる。通材焉に詳らかなり。

【註】

○太史公云云 太史公は司馬遷のこと。『史記』五帝本紀贊に「然尚書獨載堯以來、而百家言黃帝、其文不雅馴、蔣紳先生難言之」（然れども尚書獨り堯以來を載するのみ、而して百家の、黃帝を言ふは、其の文雅馴ならず、蔣紳先生之を言ひ難し）とある。

○班孟堅云云 班孟堅は班固のこと。『漢書』藝文志・尚書に「古文讀應爾雅、故解古今語而可知也」（古文、讀、爾雅に應ずるが故に、古今語を解して知る可し）とある。

○「不可」を「叵」と爲す 『說文』新附に「叵は不可なり。反可に从ふ」、「一切經音義」二十四に「叵は不可なり」とある。

○「之乎」を「諸」と爲す 『小爾雅』廣訓に「諸は之乎なり」、王引之『經傳釋詞』九に「諸は之乎なり。急いで之を言へば諸と曰ひ、徐ろに之を言へば之乎と曰ふ」とある。

○「奈何」を「那」と爲す 『正字通』に「那は借りて間辭と爲す。猶ほ何のこときなり。如何、奈何の合音なり」、顧炎武『日知錄』三十一に「之を直言すれば那と曰ひ、之を長言すれば奈何と曰ふ。一なり」とある。

○「勃鞞」を「披」と爲す 僖公二十五年『左傳』に「晉侯問原守於寺人勃鞞」（晉侯、原の守を寺人勃鞞に問ふ）とあり、その杜預注に「勃鞞は披なり」とある。

○「邾婁」を「鄒」と爲す 「邾婁」は周の国の名。『說文通訓定聲』に「鄒は今の山東省兗州府鄒縣なり。鄒は邾婁の合聲。戰國の時、穆公、號を改め、邾婁を鄒と爲す。後に楚の滅ぼす所と爲る」という。

○「終葵」を「椎」と爲す 『周禮』考工記・玉人に「大圭長三尺、杼上終葵首、天子服之」（大圭長さ三尺、上を杼^{きこ}ぐ終葵^{かしこ}の首あり、天子之を服す）とあり、鄭

玄注に「終葵は椎なり」とあり、賈疏に「終葵は椎なりと云ふは、齊人、椎を謂ひて終葵と爲す。故に終葵は椎なりと云ふ」という。また『說文』六上にも「椎は擊なり。齊、之を終葵と謂ふ」とある。

○「鞠窮」を「芎」と爲す 適當な例であるかどうか分からないが、宣公十二年『左傳』に「叔展曰、有麥鞠窮乎。曰、無。有山鞠窮乎。曰、無」（叔展曰く、麥鞠有るか。曰く、無し。山鞠窮有るか。曰く、無し）とあり、その杜注に「麥鞠、鞠窮は、濕を禦ぐ所以なり。無社をして泥水中に逃がさんと欲す。無社解さず。故に無しと曰ふ」とある。『本草』に「芎藭」があり、『辭通』には「鞠芎は雙聲通段す。芎窮、鞠窮は實は一なり」という。

○「不律」を「筆」と爲す 『說文』三下に「聿、所以書也。楚謂之聿、吳謂之不律、燕謂之弗、秦謂之筆」（聿は書く所以なり。楚、之を聿と謂ひ、吳、之を不律と謂ひ、燕、之を弗と謂ひ、秦、之を筆と謂ふ）とあり、『爾雅』（釋器）の「不律、之を筆と謂ふ」の郭注に「蜀人は筆を呼びて不律と爲すなり。語の變轉なり」という。

○「須葑」を「菰」と爲す 『爾雅』釋草に「須は葑從なり」とあり、注『齊民要術』三引に「江東呼びて蕪菁と爲す。或いは菰と爲す。菰須、音相近し」という。また『說文通訓定聲』に「須は、即ち蕪菁なり。一に曰く、菰なり。菰須は一聲の轉なり」という。

○孫炎 三國時代、魏の樂安の人。字は叔然。學を鄭玄の門に受け、東州の大儒と稱される。『爾雅音義』を作り、盛んに反切を用いて古人の譬況の説を變じた。孫炎が反切を創始したという説は『顏氏家訓』音辭篇、『經典釋文』敘録、『史記』正義、『崇文總目』序などに見える。

○反切の字紐は西域よりもたらされた 沈括『夢溪筆談』卷十五・芸文二に「切韻之學、本出于西域。漢人訓字、止曰讀如某字、未用反切」（切韻の學は、本西域に出づ。漢人字を訓するに、止だ讀むこと某字の如しと曰ひ、未だ反切を用ひず）という。

○戴震の『東原集』 戴震『東原集』卷四「書玉篇卷末聲論反紐圖後」に『玉海』に『三十六字母圖』一卷、僧守溫撰有り。呂介福曰く、『大唐舍利、字母三十を創る。後に溫首座、益すに熾、牀、幫、滂、微、奉の六母を以てす』と。然らば則ち字母三十六は、守溫に定まる。珙の後に在る者なり。唐の季已に是れ有りと雖も、而れども其の學著はれず。故に唐の代を終へ、以て宋初に迄ふまで、絶へて字母の稱を聞かず」といふ。

○『顔氏家訓』已に其の端を發す 『顔氏家訓』音辭第十八に、南北によつて読み方が異なる例、時代によつて読み方が異なる例、方言によつて読み方が異なる例などを挙げて、「此の例甚だ廣し。必ず須く考校すべし」と指摘する。

○『經典釋文』敘錄は頗る其の失に沿ふ 『經典釋文』は漢魏六朝の二百三十家あまりの音切を採り、諸儒の訓詁を掲載し、各本の異同を証したものである。『經典釋文』敘錄・條例に「余既に音を撰し、須く紕謬を定むべし。若し兩本俱に用ひ、二理兼ね通ずれば、今並びに之を出だして以て同異を明らかにす。其の涇渭相亂れ、朱紫分つ可きも、亦悉く之を書し、隨ひて刊正を加ふ。復た他經の別本有りて、詞反し義乖りて又之を存する者は、示して異聞を廣むるのみ」とある。

○この一段はほぼ全文が『經解入門』說經必先識音韻第二十五からの引用である。又古時九州、語言不同。而誦詩讀書、同歸正讀。故太史公曰、言不雅馴、蔣紳難言。班孟堅曰、讀應爾雅、古語可知。雅者正也。近世一淆於方言、一誤於俗師、至於句讀離合。文義所繁、尤宜講明。音韻雅正可據者、有唐陸德明經典釋文一書。其中皆采集魏晉南北朝諸家音釋。不同者并存之。各本經文不同者標出之。此可聽學者自視家法、擇善而從、總不出此書之外。即可爲有本之學。經典釋文皆用反切。反切者何。反翻也。猶言翻譯也。反切之反、平聲、讀如平反之反、與翻同字。通鑑注音、即書作翻。宋人有翻譯名義集。切急也。唐人忌反字、改稱切。反者一字翻成兩聲。切者兩字合成一聲。其實一也。緩讀則是反切之兩字、急讀便成所求之一音。如經傳所載、不可爲回、之乎爲諸、奈何爲那、勃鞞爲拔、邾婁爲鄒、終葵爲椎、鞠窮爲苟、不律爲筆、須葑爲菰。三代語如此者、不可枚舉。魏孫炎因創爲反語之法、以兩字定

一音、爲直音一字易差。字下注音某者、名直音。一形容有寫讀。一聲亦恐小變。反切兩音難混也。有兩字互相參檢。不至兩字形聲。一時俱誤也。反切之義、不過如此。法甚簡、理甚淺。婦孺可曉。初製反切之時、不過取其合聲。就此兩字推測之、則上二字必同母、下一字必同韻。此乃自然之理、不勞求索而自合。乃宋以後人、不信古經、而好佛書。遂以爲反切字紐出於西域、牽合華嚴字母、等攝煩碎、令人迷罔。其實與三代秦漢六朝以來之聲韻、絲毫無關。夫經字須用反切者、所以教不識字之童子也。如後世紐弄等韻之說、文士老儒、且多稽惑。古人何苦造此難事、以困童蒙哉。辨字母之非古。詳戴震東原集。因近世學人、每每以反切爲微眇難窮之事。故爲淺說之。或將反切兩音合讀、而不能得聲者、不曉古音故耳。如亨字許庚反、古讀許如潸也。長幼之長丁丈反、射中之中丁仲反、古讀丁如爭也。德行之行下孟反、古讀下爲潸、讀孟爲芒、去聲、讀行爲杭、去聲也。霸王之王於況反、古讀于如汗也。殷監之監工暫反、古讀監如淦也。妻私列反、古讀私如犀也。知古音則反切萬無一失矣。

經傳中語、同此一字、而區分平仄。音韻多門、以致韻書數部并收。異同之辨、相去杪忽。此皆六朝時學究、不達本原、不詳通變者所爲。本原者形聲、通變者轉注假借、揆之六書之義、實多難通。故顏氏家訓、已發其端。經典釋文敘錄、頗治其失。近代通儒、糾擿尤備。特初學誦讀、不示區分、將各聘方言、無從盡一。且義隨音別、解讀記也。爲易。律體詩賦一出、更難通融。此乃因時制宜之道。又同此一字、或小有形變、而解詁殊殊、點畫無差、而訓釋各別。訓因師異、事隨訓改。各尊所受、歧說滋多。然正賴此經本異文異讀異義、參差抵牾、得以鈎考古義。學者博通以後、於音義兩端、窺見本原、自曉通借。先知其分、而後知其合。不可以躐等求也。此二條雖是約說、頗有深談。小學家字書韻書、大指略具。通材詳焉。

【通釈】

經を讀むには字音を正さなければならぬ。音韻の源流については語文篇の「忌諱押通韻」の條に詳しい。

むかし、九州（中国）は州によつて言葉が異なっていたので、『詩』を朗誦し、『書』

を誦読する場合、いづれも正しい読み方で読んでいた。だから太史公(司馬遷)は「言、雅馴ならざれば、藹紳は言ひ難し」(正しく熟していない言葉は、高貴な人は口にしない)といい、班孟堅(班固)は「讀、爾雅に應ずれば、古語も知る可し」(正しい言葉にのっとった読み方をすれば、古い言葉でもわかる)といったのである。この「雅」は正という意味である。近世になると、方言音に乱されたり、世俗の教師に誤られたりして、句読が一定しなくなった。(しかし)文章の意味の重要な箇所は、とりわけ究明しなければならない。正しい字音の根拠となるものに唐の陸德明の『經典釋文』がある。これは魏晉南北朝諸家の音釈をあつめている。(音釈の)異なるものはすべて収録し、各テキストで經文が異なるものはすべて掲出してある。学ぶものがみづから家法と比較対照し、よいと思うほうをえらんだがえるようにしたのであり、(選択の基準は)この書の範圍を逸脱することはない。根拠を有する学問である。『經典釋文』にはもと「種類の本がある。武昌の成都局刻本は盧文弨校本を用いて翻刻したもので、はつきりして読みやすい。『經典釋文』は反切で音を示している。「反切」とはなにか。「反」は翻という意味であり、翻訳というのと同じである。「反切」の「反」は平声。「平反」(冤罪をすすぐ)の「反」のように読む。「翻」と同字である。『資治通鑑』が音を注する場合は「翻」に作る。宋人に『翻譯名義集』という書がある。「切」は急という意味である。唐の人は「反」字を忌んで「切」に改めた。「反」は一字をふたつの声にひきのばして読むことであり、「切」は二字をひとつの声にあわせて読むことであり、実は同じことをいっている。ゆつくり読めば反切の両字となり、はやく読めば求めようとする一音となるのである。經伝に見えるものには、「不可」を「匡」、「之乎」を「諸」、「奈何」を「那」、「勃鞞」を「披」、「邪妻」を「鄒」、「終葵」を「椎」、「鞠窮」を「莠」、「不律」を「筆」、「須臾」を「苾」とするようなものがある。三代のことばでこのようなのは枚挙にいとまがない。魏の孫炎が反語(反切)の法を創作し、二字で一音をあらわそうとしたのは、直音のように一字で音をあらわすのは誤りやすく、字の下に「音某」と注するものを直音という。ひとつの字形では書き誤りがあるかもしれず、ひとつの声も変化す

る恐れがある。反切のようにふたつの音であらわすのは、混淆しにくいからである。二字を比較検証すれば、二字の形・音が同時に両方とも誤ることはない。反切の意味はこれだけにすぎない。方法は簡単、原理は卑浅、婦人や子供でも理解できる。はじめて反切が作られた時は二字の合声をとったにすぎない。この二字から推測すれば、上の一字はかならず(あらわそうとする字と)同じ声母で、下の一字はかならず同じ韻母のはずである。これは自然の摂理であり、無理に求めようとしても自然に一致する。ところが宋以後の人は古い經書を信じず、仏教書を愛読し、とうとう反切の字紐は西域よりもたらされたものだとし、華嚴の字母と無理やり関連づけた。(その結果)等韻や撰音が複雑となり、世間の人を惑わしてしまった。(宋人がはじめて唐僧の神珙の『反紐圖』を『玉篇』の後に附した。等韻も宋人の作である。)実際には(華嚴の字母は)三代秦漢六朝以来の声韻とまったく関係がない。そもそも經の文字に反切を用いなければならなかった理由は、文字を知らない子供に読み方を教えるためである。後世の紐弄等韻の説には、文士や老儒でさえも惑わされるものが多いが、古人がわざわざこんなむづかしいことを行って童蒙を苦しめるはずがないではないか。字母が古いものでないことを弁じたのは戴震の『東原集』にくわしい。近世の学者はつねつね反切は微妙で窮めにくいことだと思ひこんでいるので、簡単に説明した。反切のふたつの音を合せて読んでも求めようとする声とならない場合があるのは、古音を理解していないからにすぎない。たとえば「亨」は許庚の反であるが、ふるくは「許」を「濟」のように読んでいた。「長幼」の「長」は丁丈の反、「射中」の「中」は丁仲の反であるが、ふるくは「丁」を「爭」のように読んでいた。「德行」の「行」は下孟の反であるが、ふるくは「下」を「許」のように読み、「孟」を「去声」のように読んでいたことから、「行」は「抗」去声と読んでいた。「霸王」の「王」は干況の反であるが、ふるくは「干」を「汚」のように読んでいた。「嬰」は私列の反であるが、ふるくは「私」を「厘」のように読んでいた。

經伝の中には、同じ文字なのに平仄を区別し、異なった読み方をし、韻書の中の複数の韻部に収録されるにいたった語がある。しかし異同の説明にほとんど違いない。これらはいづれも本原を理解せず、通変にくわしくない六朝の時の学者

がしたことである。「本原」は形声のこと、「通変」は転注や假借のこと。これを六書の義に照らし合わせると実際には通じないことが多い。だから『顔氏家訓』がすでにその端緒を開き、『經典釋文』敘録はその欠点をかなり踏襲している。近代の通儒はあますことなく糾弾している。ただ初学者が誦読する場合、読み方の違いを示さなければ、それぞれの方言音で読んでしまい、統一する手だてがなくなってしまう。なおかつ音によって意味が異なっていると、理解や記憶がしやすい。律体の詩賦がひとたびあらわれると、さらに統一するのがむづかしくなった。これは時代によって適切な方法を行うというやり方である。また同じ文字なのに、字形がわずかに異なるだけで解詁がまったく異なっていたり、点画に違いがないのに訓釈がそれぞれ違っていたりすることがある。訓は師によって異なり、事は訓にしたがって変化し、（学ぶものは）それぞれ自分が学んだことを尊んだので、異説がますます多くなったのである。しかし経書にもともとこのような文字が異なり、読みが異なり、義が異なり、参差、抵牾が存在することによって、古義を探索求することが出来る。学ぶものはあらゆることにひろく通じてから、音と義のふたつに対して本原をうかがいみれば、自然に通借にあきらかとなる。まづその相違点がわかり、そのあとに一致点がわかるのである。段階をとびこえてはならない。この二条はおおまかに説明しただけであるが、重要な内容を含んでいる。小学家の字書や韻書についての要旨はほぼそなわっている。通才はよく知っているだろう。

【書目答問】

・十三經注疏。共四百一十六卷。乾隆四年武英殿刻附考證本、同治十年廣州書局覆刻殿本、阮文達公元刻附校勘記本、明北監本、明毛晉汲古閣本。目列後。阮本最於學者有益、凡有關校勘處旁有一圈、依圈檢之、精妙全在於此。四川書坊翻刻阮本、謬謬太多、不可讀、且削去其圈、尤謬。明監、汲古本不善。

周易正義十卷、魏王弼、晉韓康伯注、唐孔穎達等正義。

尚書正義二十卷、舊題漢孔安國傳、唐孔穎達正義。

毛詩正義七十卷、漢毛亨傳、鄭玄箋、唐孔穎達正義。

周禮注疏四十二卷、漢鄭玄注、唐賈公彥疏。

儀禮注疏五十卷、漢鄭玄注、唐賈公彥疏。

禮記正義六十三卷、漢鄭玄注、唐孔穎達正義。

春秋左傳正義六十卷、晉杜預集解、唐孔穎達正義。

春秋公羊傳注疏二十八卷、漢何休解詁、唐徐彥疏。

春秋穀梁傳注疏二十卷、晉范甯集解、唐楊士勛疏。

・經典釋文三十卷、考證三十卷。唐陸德明釋文、盧文弨考證。抱經堂本、武昌局翻本、成都局翻本附孟子音義、通志堂本未善。

・資治通鑑二百九十四卷。宋司馬光。元胡三省音注。胡克家仿元本、武昌局翻本。戰國至五代。

・翻譯名義十四卷。宋釋法雲。雲棲寺刻本。

・玉篇三十卷。梁顧野王元本。唐孫強增字、宋陳彭年等重修。澤存堂本、小學

彙函重刻張本、鄧顯鶴重刻張本附札記、棟亭五種本、又明經廠大字本。

・東原集十卷。戴震。戴氏遺書內、亦附經韻樓叢書。

・顏氏家訓注七卷。北齊顏之推。趙曦明注。抱經堂本、又知不足齋本。

4

讀經宜明訓詁。

詁者古言也。謂以今語解古語。此逐字解釋者也。訓者順也。謂順其語氣解之。或全句、或兩三字。此逐句解釋者也。

時俗譌義、何嘗不逐字逐句解釋。但字義多杜撰、語意多影響耳。

訓詁有四忌。

一、望文生義。

古書多有一字數義之字、隨用而異。有假借字、字如此寫、卻不作此字解。有譌脫字。

不能強解。若不加詳考、姑就本文申之、此名望文生義。

一、欄壁虛造。

無論實字虛字、解說皆須有本。出於六朝以前書者爲有本。若以想當然之法行之、則依稀髣髴、似是而非、此名欄壁虛造。

一、鹵莽滅裂。

古事自有首尾。散見本書他書、不能臆造。古禮自有當時制度。古書自有當時文體、亦有本書義例。凡一書必有本書大例句例字例。若任意武斷、合於此而背於彼、此名鹵莽滅裂。

一、自欺欺人。

凡解經者、地名須實指何地、人名須實指何人、器物草木、須實指何器物草木。若函胡敷衍、但以地名人名器物名草木名了之、事既不詳、理即不確、此名自欺欺人。

總之、解經要決、若能以一字解一字、不添一虛字、而文從字順者必合。若須添數虛字、補綴幹旋、方能成語者、定非。

【書き下し】

經を讀むには宜しく訓詁に明らかなるべし。

「詁」は古言なり。今語を以て古語を解するを謂ふ。此れ字を逐ひて解釋する者なり。「訓」は順なり。其の語氣に順ひて之を解するを謂ふ。或いは全句、或いは兩三字。此れ句を逐ひて解釋する者なり。

時俗の講義、何ぞ皆て字を逐ひ句を逐ひて解釋せざらん。但だ字義は多く杜撰、語意は多く影響なるのみ。

訓詁に四忌有り。

一、望文生義。

古書多く一字數義の字有り、用に隨ひて異なる。假借字有り、字は此の如く寫すも、却て此の字の解を作さず。譌脱字有り。強ひて解する能はず。詳考を加へずして、姑く本

文に就きて之を串くが若き、此れを「望文生義」と名づく。

一、欄壁虛造。

實字・虚字を論ずる無く、解説には皆須らく本有るべし。六朝以前の書に出づる者は本有りと爲す。當に然るべしと思ふの法を以て之を行へば、則ち依稀髣髴として、是に似て非なるが若き、此れを「欄壁虛造」と名づく。

一、鹵莽滅裂。

古事には自ら首尾有り。本書・他書に散見し、臆造する能はず。古禮には自ら當時の制度有り。古書には自ら當時の文體有り、亦本書の義例有り。凡そ一書には必ず本書の大例・句例・字例有り。意に任せて武斷し、此れに合するも彼に背くが若き、此れを「鹵莽滅裂」と名づく。

一、自欺欺人。

凡そ經を解する者は、地名は須く何れの地を實指すべきか、人名は須く何れの人を實指すべきか、器物草木は須く何の器物・草木を實指すべきか。函胡敷衍して、但だ地名・人名・器物名・草木名を以て之を了れば、事既に詳らかならず、理即ち確かならざるが若き、此れを「自欺欺人」と名づく。

之を總するに、經を解する要決は、若し能く一字を以て一字を解し、一虚字を添へずして、文從字順なる者は必ず合す。若し須く數虚字を添へ、補綴幹旋すべくして、方めて能く語を成す者は、定めて非なり。

【註】

○この一段は『經解入門』の數處から引用された部分がある。

所謂訓詁、前已詳言之矣。而其學實可專門而名家、何也。說經之道、以訓詁爲第一要事、訓詁通、斯經義自無不通矣。詁者古言也。謂以今語解以古語也。訓者順也。謂順其語氣解之也。以今語解古語、則逐字解釋者也。順其語氣解之、則逐句解釋者也。時俗講義、何皆不逐字逐句解釋。但字義多杜撰、語意多影響。與所謂訓詁有別。訓詁者必古有是訓、確而見之故書然後引、而釋經不附會、不穿鑿、不

憑空而無據。兩漢諸儒、類皆明於訓詁。故其立說切實可靠、不同宋人之以空言說理者。國朝經學家、如顧氏閻氏而下、亦皆精通乎此。故能上接漢代、且有發漢儒所未發者。不然、憑空臆造、蔑古又孰甚哉。總之、解經有至切至要之決、但能以一字解一字、不添一虛字、而文從字順、疑義頓晰者、便是絕好。解經若須添數虛字、補綴辭、方能成語者、定非。然欲通訓詁、宜講漢學。漢學者、漢人注經講經之說也。經是漢人所傳、注是漢人創作。義有師承、語有根據、去古最近、多見古書、能識古文、通古語。故必以漢學爲本、而推闡之、乃能有得。（有訓詁之學第三十四）

古書一字一句、皆有精義。若不加詳考、就文說之、如王介甫以波爲水皮、蘇東坡不知鳩字从鳥九聲之義、而云詩曰、鳩鳩在桑、其子七矣、合一父一母則爲九、故其文從九之類。此爲望文生訓。又經文數語、必與全篇大義相屬。解者不審全篇之義、姑就本文串之、似爲近理、亦爲望文生訓、初學切宜深戒。前人成說、如犯此弊、亦必細心爲之糾正。（不可望文生訓第三十八）

凡說經、一字一義、必當求其實據。原原本本、紉出來歷、方爲可靠。若以想當然爲是之法行之、依稀髣髴、似是而非、此名虛造。昔說文紉管云、世人詭更正文、攔壁虛造不可知之書、變亂常行、以耀於世。然則虛造之弊、漢時已有。故許君有說文解字之作。然漢俗虛造、大半由於無書可考。今人生經學昌明之會、典策圖書無乎不備、老師大儒、互相證明、而猶不能自勉、力窮源委、以蹈虛造之習、其得罪許君孰甚。學者有志窮經、必先力除此病。然後可與入道。（解經不可虛造第三十七）

古事自有首尾、古禮自有當時制度。或散見本經、或錯見各經、或經傳尚略諸子各傳記有詳之者、學者須詳求其音讀訓詁、考其當日事實。音訓明、方知此字爲何語。考據確、方知此物爲何物、此事爲何事、此人爲何人。然後知聖賢此言是何意義。不然、增會其義、敷衍成篇、即或有理、亦是郢書燕說、於經旨何與。故解經戒附會。（不加附會無據第四十二）

凡一書必有本書之大例、有句例、有字例。學者讀時、必先知其例之所存、斯解時

不失其書之文體。如易明天道、詩盡人情、書道政事、禮詳制度、春秋多微詞、爾雅記言語異同、論語言治道不言治法之類。此各書之大例也。而易無虛象、詩無達詁、書有各代史筆之不同、春秋有三傳記載之各別、三禮典制異而統同、爾雅訓詁同而亦異。此句例字例之所宜講也。注家亦有例、如馬鄭之易皆費氏古文、伏孔尚書今古互異、毛公傳詩亦守古本、鄭注三禮則據今文、何氏范氏深通公穀之義、賈逵服虔乃得左氏之傳。此注家之例之分也。至於諸子各史、皆有大例。學者欲讀其書、宜先知其例。書例既明、則其義可依類而得矣。（體例不可不熟第四十六）

【通釈】

經を説むには訓詁に明らかなければならない。

「詁」は古言（むかしの言葉）という意味で、現在の言葉でむかしの言葉を解釈することをいう。これは文字の順序にしたがって一字一字解釈することである。

「訓」は順という意味で、文の語氣にしたがって解釈することをいう。全句あるいは三字、これは句の順序にしたがって解釈することである。

ちかごろの世間の講義は文字や句の順序にしたがって解釈していないわけではないが、文字の意味は杜撰で、語意の説明は根拠のない場合が多い。

訓詁には四つのいましむべきことがある。

一、望文生義

古書には、一字で複数の意味をもつ字があり、働きによって意味が異なる。仮借字、字はそう書くが、その字の意味としては解釈しない。誤字脱字無理に解釈できない。がある。

（これらの文字を）詳細に考察せずに、とりあえず本文から勝手に意味を推測するようなこと、これを「望文生義」（文を望んで義を生ず）という。

一、攔壁虚造

実字・虚字に関係なく、解釈には根拠がなければならない。六朝以前の書にみえる解釈は根拠があるといえる。こうであるにちがいないという思い込みで解釈すると、あいまい模糊として、一見正しいようにみえて実は正しくないようなこと、こ

れを「欄壁虚造」(壁に欄^いひて虚造す)という。

一、國莽滅裂。

古事には首尾がそなわっている。事はその書や他書に散見しており、勝手に捏造することはできない。古札には当時の制度が存在している。古書には当時の文体があり、その書の義例がある。書物にはかならずその書の大例・句例・字例がある。自分勝手に独断的な判断を下し、一方には合致するが一方には合致しないようなこと、これを「國莽滅裂」という。

一、自欺欺人。

そもそも経を解釈するには、この地名は実際にはどの地を指すのか、この人名は実際には誰を指すのか、この器物・草木は実際にはどんな器物・草木を指すのか(といったことを考えながら解釈しなければならない)。適当に「こまかして単に地名・人名・器物名・草木名であるとするだけでおわれば、事実関係に詳しくならず、理解も確実にはならないようなこと、これを「自欺欺人」(自ら欺き人を欺く)という。

要するに、経を解釈する秘訣は、一字を一字で解釈し、一字の虚字も加えない、それで文章や用字が適切であるものは、かならず(経の意味と)合致している。虚字をいくつか加えて、補充調整してはじめて言葉として成立するのは、きつとあやまつている。

— 5 —

宜識漢學。欲曉字、欲正音、欲通訓詁、即須用此下兩條功夫。

漢學者何。漢人注經講經之說是也。經是漢人所傳、注是漢人創作。義有師承、語有根據、去古最近、多見古書、能識古字、通古語、故必須以漢學爲本、而推闡之、乃能有合。

以後諸儒傳注、其義理精粹、足以補正漢人者不少。要之、宋人皆熟讀注疏之人。

故能推闡發明。朱子論賈學治經、謂宜討論諸家之說、各立家法、而皆以注疏爲主云云。即如南宋理學家如魏鶴山、詞章家如葉石林、皆爛熟注疏。其他可知。儘不知本源、即讀宋儒書、亦不解也。方今學官所頒十三經注疏、雖不皆爲漢人所作、然注疏所言、即漢學也。國朝江藩有漢學師承記。嘗有、漢人說豈無淵源。漢學者、用漢人之法、得漢人之意之謂也。

漢學所要者二。一音讀訓詁、一考據事實。音訓明、方知此字爲何語。考據確、方知此物爲何物、此事爲何事、此人爲何人。然後知聖賢此言是何意義。不然、空談臆說、望文生義、即或有理、亦所謂野書燕說耳。於經旨無與也。譬如晉人與楚人語、不通其方言、豈能知其意中事。不問其姓氏里居、豈能斷其人之行誼何如耶。阮元經籍纂疏、王念孫廣雅疏證、爲訓詁最要之書。

十三經注疏及相臺岳氏本五經、江蘇曹州曾依殿本再翻、成都新刻、皆古注。易、王弼韓康伯注。書、孔安國傳。詩、鄭康成注。春秋左傳、杜預集解。禮記、鄭康成注。沿明制通行之五經、皆宋元注。易、朱子本義程傳。書、蔡沈傳。詩、朱子集傳。春秋、舊用胡傳。今廢、仍用左傳杜注。禮記、陳澧集說。此爲正經正注。御纂七經、乃舊歷代傳說裁定。

【書き下し】

宜しく漢學を講ずべし。字を識らんと欲し、音を正さんと欲し、訓詁に通せんと欲すれば、即ち須く此の下の兩條の功夫を用ふべし。

漢學とは何ぞや。漢人、經に注し經を講ずるの說、是れなり。經は是れ漢人の傳ふる所、注は是れ漢人の創作。義に師承有り、語に根據有り、古を去ること最も近く、多く古書を見、能く古字を識り、古語に通ず。故に必ず須く漢學を以て本と爲し、之を推闡すべくして、乃ち能く合すること有り。

以後の諸儒の傳注、其の義理は精粹にして、以て漢人を補正するに足る者は少なからず。之を要するに、宋人は皆注疏を熟讀するの人なり。故に能く推闡發明す。朱子、賈學治經を論じて、「宜しく諸家の說を討論して、各おの家法を立つるに、皆注疏を以て主と爲すべし云云」と謂ふ。即ち如へば南宋の、理學家は魏鶴山の如き、詞章家は葉石林的如きは、皆注疏に爛熟す。其の他は知る可し。儘し本源を知らざれば、即ち宋儒の書を讀むも亦解せ

ざるなり。方今、學官領つ所の『十三經注疏』は皆漢人の作りし所と爲さずと雖も、然れども『注疏』言ふ所は即ち漢學なり。國朝の江藩に『漢學師承記』有り。當に看るべし。漢人の説豈に謬漏無からんや。『漢學』とは漢人の法を用ひて、漢人の意を得るの謂ひなり。

漢學の要する所の者は二。一は音韻訓詁、一は考據事實。音訓明らかにして、方めて此の字、何語たるかを知る。考據確かにして、方めて此の物、何物たるか、此の事、何事たるか、此の人、何人たるかを知る。然る後に聖賢の此の言是れ何の意義たるかを知る。然らざれば空談臆説、望文生義し、即ひ或いは理有るも、亦所謂野書燕説のみ。經旨に於て與る無きなり。譬へば晉人、楚人と語るが如し。其の方言に通じざれば、豈に能く其の意中の事を知らんや。其の姓氏里居を問はざれば、豈に能く其の人の行誼如何かを斷ぜんや。阮元の『經籍纂詁』、王念孫の『廣雅疏證』は、訓詁最要の書と爲す。

『十三經注疏』及び『相臺岳氏本五經』江蘇・貴州會て殿本に依りて再翻す。成都にて新たに刻す。は皆古注なり。『夏』は王弼・韓康伯の注。『書』は孔安國の傳。『詩』は鄭康成の注。『春秋左傳』は杜預の集解。『禮記』は鄭康成の注。明制に沿ひ通行せる『五經』は皆宋元の注なり。『易』は朱子の本義・程の傳。『書』は蔡沈の傳。『詩』は朱子の集傳。『春秋』は舊胡傳を用ふ。今廢されて仍ほ『左傳杜注』を用ふ。『禮記』は陳澧の集説。此れを正經正注と爲す。『御纂七經』は乃ち歷代の傳説を舊萃して裁定す。

【註】

○朱子、貢舉治經を論じて云云 朱熹『學校貢舉私議』『朱子文集』卷十三に「今欲正之、莫若討論諸經之說、各立家法、而皆以注疏爲主」（今之を正さんと欲すれば、諸經の說を討論して、各おの家法を立つるに、皆注疏を以て主と爲すに若くは莫し）とある。

○野書燕説 原意を曲解することのたとえ。『韓非子』外儲說左上の、野の人が送った手紙の文を燕の人があやまって理解した故事による。

○この一段は『經解入門』訓詁之學第三十四、不可附會無據第四十二から引用されている。

總之、解經有至切至要之決、但能以一字解一字、不添一虛字、而文從字順、疑義頓晰者、便是絕好。解經若須添數虛字、補綴餘旋、方能成語者、定非。然欲通訓詁、宜講漢學。漢學者、漢人注經講經之說也。經是漢人所傳、注是漢人創作。義有師承、語有根據、去古最近、多見古書、能識古文、通古語。故必以漢學爲本、而推闡之、乃能有得。（訓詁之學第三十四）

古事自有首尾。古禮自有當時制度。或散見本經、或錯見各經、或經傳尚略、諸子各傳記有詳之者。學者須詳求其音韻訓詁、考其當日事實。音訓明、方知此字爲何語。考據確、方知此物爲何物、此事爲何事、此人爲何人。然後知聖賢此言是何意義。不然、增會其義、敷衍成篇、即或有理、亦是野書燕説。於經旨何與。故解經戒附會。（不可附會無據第四十二）

【通釈】

漢學を研究しなければならぬ。文字を知り、音を正し、訓詁に精通しようと思えば、以下のふたつの方法を行いなさい。

漢學とはなにか。漢の人が經に対して注を加え研究した説がそれである。經は漢の人が伝えたもの、注は漢の人が創作したものである。意味には師から受けついだものがあり、言葉には根拠がある。（漢の人は）古代と時代がもっとも近く、たくさん古書を読み、よく古字を覚えていて、古語にも通じていた。だから漢學を基礎としておしひろめることによって（經の内容と）合致することができる。

これ以後の諸儒の伝注は、義理が純粹であつて、漢の人の説を補正するにたるものは少なくない。要するに宋の人はいづれも注疏を熟説した人なので、おしひろめて（新しい義理を）創出することができたのである。朱子が貢舉治經を論じて、「諸家の説を討論して、それぞれ家法を立てるには、注疏を主としなさい云云」という。たとえば南宋に

おける魏鶴山（魏了翁）のような理学家、葉石林（葉夢得）のような詞章家でさえみな注疏に精通していることからすると、それ以外の学者はいわずもがなである。しかしもし本源である（注疏）を理解していなければ、たとえ宋儒の書を読んでも理解することはできない。最近學官が頒布した『十三經注疏』は、すべてが漢の人の作であるとはいえないが、『注疏』の内容は漢学である。清朝の江藩に『漢學師承記』という著書がある。読みなさい。漢の人の説にどうして誤りや遺漏がなからうか。「漢学」とは漢の人の方法を用いて漢の人の考えを身につけるという意味である。

漢学が必要とするものはふたつある。ひとつは音読訓詁、ひとつは考掘事実である。音読訓詁が明らかになつてはじめてこの字がなんという意味であるかがわかる。考掘が確実になつてはじめてこの物がどういう物であるか、この事がどういう事であるか、この人がどういう人であるかがわかる。そのあとで聖賢のこの言葉がどういう意味であるかがわかるのである。さもないければ空談臆説、望文生義であつて、たとえ理にかなつていたとしても、いわゆる郢書燕説にすぎず、經の内容とはなんら関係がない。これをたとえろと、晉の人と楚の人が話をしているようなものである。相手の方言に通じていなければ、どうして相手の考えていることがわかるか。名前や住んでいるところをたずねなければ、どうしてその人の行いがどうであるかを判断できようか。阮元の『經籍纂詁』、王念孫の『廣雅疏證』は、訓詁に関するものとも重要な書物である。

『十三經注疏』と『相臺岳氏本五經』江蘇と貴州ではかつて殿本をもとに翻刻されたことがある。成都で新しく刻された。はいづれも古注である。『易』は王弼・韓康伯の注。『書』は孔安國の傳。『詩』は鄭康成の注。『春秋左傳』は杜預の集解。『禮記』は鄭康成の注。現在通行している、明の制度にのつとつた『五經』はいづれも宋元の注である。『易』は朱子の本義・程子の傳。『書』は蔡沈の傳。『詩』は朱子の集傳。『春秋』は以前は胡安國の傳を用いていたが、いまは『左傳』杜預注を用いる。『禮記』は陳澧の集說。これが正經正注である。『御纂七經』は歴代の伝や説を集めて取捨審定している。

【書目答問】

- ・朱子大全集一百一十二卷。宋朱子。蘇方炳刻本。朱子古文 卷、貴陽官本。
- ・石林居士建康集八卷。宋葉夢得。
- ・經籍纂詁二百一十六卷。阮元。揚州原刻本。以經爲主、故列此。
- ・廣雅疏證十卷。王念孫疏證。家刻本、學海堂本。
- ・國朝漢學師承記八卷。附經師經義目錄一卷。江藩。原刻本、粵雅堂本。
- ・十三經注疏。共四百一十六卷。乾隆四年武英殿刻附考證本、同治十年廣州書局覆刻殿本、阮文達公元刻附校勘記本、明北監本、明毛晉汲古閣本。目列後。阮本最於學者有益、凡有關校勘處旁有一圈、依圈檢之、精妙全在於此。四川書坊翻刻阮本、謬謬太多、不可讀、且削去其圈、尤謬。明監、汲古本不善。
- ・相臺岳氏本古注五經。宋岳珂校刻。明翻刻宋本。武英殿翻刻本附考證、江南翻刻本、貴陽翻刻本、廣州翻刻本、成都翻刻本。
- ・易九卷。王韓注、附略例一卷。
- ・書十三卷。孔傳。
- ・詩二十卷。毛傳、鄭箋。
- ・春秋左氏傳三十卷。杜集解。
- ・禮記二十卷。鄭注。
- ・明監本宋元人注五經。明經廠本、揚州鮑氏刻本、南昌萬氏刻本、又江寧局本、又崇道堂本、又武昌局本。通行杜氏巾箱六經單注本、尚不謬。坊本音注、皆不可據。
- ・易、宋朱子本義四卷。宋程子傳四卷。江寧本本義、依朱子原本十二卷、兼刻程傳、他本無。
- ・書、宋蔡沈集傳六卷。
- ・詩、朱子集傳八卷。武昌局本附序。
- ・春秋、舊用宋胡安國傳、乾隆開廢、改用左傳杜注三十卷。江寧本左傳有姚培謙補注、鮑本合刻三傳、附春秋傳說彙纂。

禮記、元陳澧集說十卷。崇道堂本兼錄御案。新刻五經、江寧本最善。

御纂七經。殿本、杭州局本、武昌局本、成都書局本不精。目列後、此當敬遵與正注同。

周易折中二十二卷。康熙五十四年依古本經傳分編。又乾隆二十年欽定周易述義十卷、殿本。

書經傳說彙纂二十一卷。康熙末至雍正八年。

詩經傳說彙纂二十一卷。康熙末年。又乾隆二十年欽定詩義折中二十卷、多宗毛鄭、殿本。

春秋傳說彙纂三十八卷。康熙三十八年。

周官義疏四十八卷。乾隆十三年。

儀禮義疏四十八卷。同上。

禮記義疏八十二卷。同上。

6

宜讀國朝人經學書

經語惟漢人能解、漢儒語惟國朝通儒能偏解、何也。國朝諸大儒、讀書多、記書真、校書細、好看古書、不敢輕改古本、不肯輕駁古說、善思、善悟、善參校、善比例、善分別真偽。故經學爲千古之冠。

書多矣、以皇清經解爲大宗。雖未全錄、已得大概。此書一千餘卷、當從何種看起。先看郝疏爾雅、段注說文、經義述聞三種。此書、書精價廉、一舉而得數十百種書。計無便於此矣。乍看注疏、人所不耐、故必以國朝人經說先之。學海堂輯刻皇清經解、成書後、續出者尚多、先出而未見未收者、亦不少。以此例之即得。

通志堂刻經解、卷軸雖富、善華無多。其中上頭、多有別刻本。李衡周易義海撮要、敖繼公儀禮集說、衛昞禮記集說、無別刻本。何義門識之、方望溪刪之、甚有微詞。其與學海堂刻經解、相去遠甚。若治經從此下手、窮年莫殫、所得有限。不惟徒勞、且茫無師法、

轉致迷罔矣。若於此道源流派別、既已秩然、再取讀之、未爲晚也。

【書き下し】

宜しく國朝人の經學書を讀むべし。

經の語は惟だ漢人のみ能く解し、漢儒の語は惟だ國朝の通儒のみ能く偏く解するは、何ぞや。國朝の諸大儒は、書を讀むこと多く、書を記すること眞、書を校すること細、好く古書を看、敢て輕がるしくは古本を改めず、肯て輕がるしくは古說を駁せず、善く思ひ、善く悟り、善く參校し、善く比例し、善く眞偽を分別す。故に經學は千古の冠と爲す。

書多きも、『皇清經解』を以て大宗と爲す。未だ全錄せずと雖も、已に大概を得たり。此の書一千餘卷、當に何種より看起すべき。先づ郝疏の『爾雅』、段注の『說文』、『經義述聞』の三種を看よ。此の書、書は精にして價は廉なり。一舉にして數十百種の書を得、計るに此より便なるは無し。乍ち注疏を看るは、人の耐へざる所なり。故に必ず國朝人の經說を以て之を先にせよ。學海堂、『皇清經解』を輯刻す。書を成した後、續けて出づる者尚ほ多く、先に出づるも未だ見ず未だ收めざる者も亦少なからず。此を以て之を例とすれば即ち得。

通志堂刻せる『經解』は、卷軸富なりと雖も、善華は多くは無し。其の中の上頭には、多く別の刻本有り。李衡の『周易義海撮要』、敖繼公の『儀禮集說』、衛昞の『禮記集說』には別の刻本無し。何義門、之を譏り、方望溪、之を刪し、甚だ微詞有り。其の學海堂刻せる『經解』と、相去ること遠甚なり。若し經を治むるに此れより手を下せば、窮年殫くる莫く、得る所限り有りて、惟だに徒勞なるのみならず、且つ茫として師法無く、轉た迷罔に致る。若し此の道の源流派別、既に已に秩然なるに於いて、再び取りて之を讀むも、未だ晚しと爲さざるなり。

【註】

○『皇清經解』 『通志堂經解』には顧炎武らが收録されていないことにあきたら

ず、阮元らが學海堂で編刻したもの。『學海堂經解』ともいう。一千四百卷、三百六十二冊。のちに『皇清經解』の遺漏を集めて、王先謙が南菁書院で『皇清經解續編』を出版した。一千四百三十卷、三百二十冊。經史に関する部分だけしか収録されておらず、序や跋も収録されていないことが多い。

○通志堂刻せる『經解』 納蘭成徳が編刊した『通志堂經解』のこと。徐乾學の傳是樓所藏の唐宋元明の諸儒の經解を集めている。一千七百八十一卷。通志堂は納蘭成徳の室号。

○何義門 何焯のこと。何焯は二十五歳の時に貢生に拔んでられ、徐乾學の門生となった。徐乾學が『通志堂經解』を編纂するに当って、何焯は校正を担当した。しかし何焯は性狷介でよく人と衝突し、徐乾學とも仲違いし、破門された。何焯は『通志堂經解』の選択と校勘の蕪雜さを批判し、『通志堂經解目録』(未見)を作った。葉德輝『書林清話』卷九「納蘭成徳刻通志堂經解之一」に「國初の人の刻書にも亦高下有り。納蘭成徳の通志堂經解は、宋元人の遺書を表章し、其の功誠に没す可からず。然れども主裁者に卓識無く、門戸の見過^{はな}だ深し。凡そ諸家の經解は、程朱の一派に非されば、則ち録さず。又其の刻するの本に宋元の舊本の據る可き有るも、全く取りて以て校勘せず。何義門焯の批閱せる目録の注文を觀れば、則ち當時の草草知る可し」とある。

○方望溪 方苞のこと。方苞は二十歳のころに『通志堂經解』を手に入れたと、その後二十余年にわたって手を加えながら精言を選んで理解につとめた。蘇惲^{そゑ}元「方望溪先生年譜」二十六年丁未の項に「先生二十歳、五經注疏大全を循覽し、諸色の筆を以て之を別つ。功を用ふること少き者は亦三四周す。其の後崑山刻の通志堂宋元經解出づ。先生句節字劃すること凡そ三次。荃^{さん}難^{なん}して其の精言を取りて之を會通す。二十餘年にして始めて畢る」とある。

○この一段は『經解入門』平日讀經課程第五十一から引用されている。

一宜讀國朝人經學書。蓋經語惟漢人能解、漢儒語惟國朝通儒能備解。所以然者、國朝諸大儒、讀書多、記書真、校書細、好看古書、不敢輕改古本、不肯輕駁古說、

善思、善悟、善參校、善比例、善分別真偽。故經學爲千古之冠。書多矣、以皇清經解爲大宗。而余近儒說經得失篇所列各書皆善、可讀。

【通釈】

清朝の人の經學書を説まなければならない。

經の言葉は漢の人だけが理解することができ、漢儒の言葉を清朝の通儒だけが全面的に理解できるのはなぜか。清朝の大儒たちは、たくさん書を読み、正確に書を記憶し、精密に校勘し、好んで古書を読み、怪々しく古本を改めることはせず、怪々しく古説を反駁することはせず、よく考え、よく理解し、よく参校し、よく比較し、よく真偽を分別したので、經學が千古に冠たるものとなったのである。書物はたくさんあるが、『皇清經解』がその代表(的)な書物である。『皇清經解』は(原刊本の)全巻を収録しているわけではないが、主要な部分は収録されている。この書『皇清經解』は千巻あまりあるが、なにから読めばよいのか。まづ郝懿行疏の『爾雅』段玉裁注の『説文』(王引之の)『經義述聞』の三種を読みなさい。この書は正確で、安価である。これを購入するだけで数十種類、数百種類の書がまとめて手にはいる。これより便利なものはないと思う。直接(膨大な量の)注疏を読むのは普通の人には耐えられないことである。そこで清朝の人の經書の解説書を先に読むのがよい。學海堂が『皇清經解』を編集出版したが、完成したあと、続けて出版された書物も多く、それ以前に出版されていたながら『皇清經解』に収録されていない書物も少なくない。この体裁にならって未収の書物をあつめたならば(これに続くものが)すぐにできるであろう。

通志堂が刻した『經解』『通志堂經解』は、量は豊富であるが、すぐれたものはあまりない。そのなかでも特にすぐれたものには別の刻本があるものが多い。ただ李衡の『周易義海撮要』、敖繼公の『儀禮集説』、衛湜の『禮記集説』には別の刻本がない。何義門(何焯)は(選択と校勘の粗雑さを)識り、方望溪(方苞)は削除訂正して、遠まわしに批判している。學海堂刻の『經解』『皇清經解』に比べると雲泥の差がある。

もし經の研究をこれからはじめたとしたら、生涯窮めることができず、身につくことにも限界がある。単に徒勞に終るだけでなく、師法もはつきりせず、ますます混乱に陥ってしまう。經学の源流派別に対して体系的に理解してから読んでもおそくはない。

【書目答問】

- ・皇清經解 阮元。前書目中以便文稱學海堂經解、或阮刻經解。
- ・爾雅義疏二十卷 郝懿行。孫郝聯薇校刻足本、沔陽陸氏刻本、學海堂本皆不足。郝勝於邵。
- ・說文解字段氏注三十卷、六書音韻表五卷 段玉裁。原刻本、蘇州重刻本、學海堂本、武昌局本附段氏汲古閣說文訂一卷。
- ・經義述聞三十二卷 王引之。自刻本、江西刻本、學海同本只二十八卷。
- ・通志堂九經解 納蘭性德。廣州書局重刻。
- ・周易義海撮要十二卷 宋李衡。納蘭性德編刻通志堂經解本、廣州書局重刻通志堂經解本。
- ・儀禮集說十七卷 元敖繼公。
- ・禮記集說一百六十卷 宋衛湜。通志堂本。

— 7 —

宜專治一經。

十三經豈能盡通。專精其一、即已不易。歷代經師大儒、大約以一經名家者多。兼通羣經、古今止有數人。今且先治其一、再及其他。但仍須參考諸經、博綜羣籍、方能通此一經。不然、此一經亦不能通也。

【書目下二】

宜しく専ら一經を治むべし。

『十三經』豈に能く盡く通ぜんや。専ら其の一に精なることすら、即ち已に易からず。歷代の經師大儒、大約一經を以て家に名づくる者多し。羣經に兼ね通するは、古今止だ數人有るのみ。今且く先づ其の一を治め、再び其の他に及べ。但だ仍ほ須く諸經を參考し、羣籍を博綜すべくして、方めて能く此の一經に通ず。然らざれば、此の一經も亦通する能はざるなり。

【通釈】

ひとつの經を専門的に研究しなければならない。

『十三經』すべてに精通することがどうしてできようか。ひとつの經に精通することすら容易ではない。歷代の經師大儒のうち、ひとつの經に精通しているというところで專家とみなされている人は多い。複数の經に精通している人は、古今を通じて數人あるにすぎない。とりあえずひとつの經を研究し、それからほかの經に範圍をひろげなさい。ただその際やはり諸經を参照し、さまざまな書籍を幅ひろく総合的に研究することによって、はじめてひとつの經に精通することができるのである。さもないければそのひとつの經にさえも精通することはできない。

【書目答問】

- ・十三經注疏。共四百一十六卷。乾隆四年武英殿刻附考證本、同治十年廣州書局覆刻殿本、阮文達公元刻附校勘記本、明北監本、明毛晉汲古閣本。目列後。阮本最於學者有益、凡有關校勘處旁有一圈、依圈檢之、精妙全在於此。四川書坊翻刻阮本、謬謬太多、不可讀、且削去其圈、尤謬。明監、汲古本不善。

— 8 —

治經宜有次第。

先師旌德呂文節教不佞曰、欲用注疏工夫、先看毛詩。次及三禮、再及他經。其說至精。請申其義。蓋詩禮兩端、最切人事。義理較他經爲顯、訓詁較他經爲詳。其中言名物、學者能達與否、較然易見。且四經皆是鄭君玄注、完全無關。詩則毛傳粹然、爲西漢經師遺文。更不易得。欲通古訓、尤在於茲。古人訓詁、乍讀似覺不悅、非於此冰釋理順、解經終是隔障。禮之條目頗多。卷帙亦鉅。初學畏難。詩義該比興、兼得開發性靈。鄭箋多及禮制。此經既通、其於禮學、尋途探求、自不能已。詩禮兼明、他經方可著手。書道政事、春秋道名分。典禮既行、然後政事名分、可得而言也。尚書家伏生、左傳家賈生、公羊家董膠西、何劭公、皆精於禮學。案其書可知。易道深微、語簡文古。訓詁禮制、在他經爲精、在易爲粗。所謂至精乃在陰陽變化消息。然非得其粗者、無由遇其精者。此姚姬傳論學古文法。援之以爲治易法。精者可遇而不可驚。鑒則矣。三禮之中、先儀禮禮記、次周禮。儀禮句辭字實。難讀能解、難記易曉。注家最少、異說無多。好在禮記一書。即是外傳。禮記難於儀禮。儀禮止十七件事、禮記之事多矣。特其文條遺耳。周禮門類較多。事理更爲博大。漢人說者亦少。晚出之故。故較難。然鄭注及國朝人零星解說、亦已明白。尚書辭義既古。隸古傳寫、通借譌誤。自漢初即有今古文兩家、異文歧讀。此謂真古文。非蔡傳所云今文無、古文有之古文也。至西晉梅氏古文晚出、唐初僞孔傳專行、六朝、江左即盛行、未定一尊耳。而漢代今古文兩家之經傳、一時俱絕。故尤難通。春秋乃聖人治世大權、微文隱義。本非同家人言語。史記明言之。三傳並立、旨趣各異。公羊家師說雖多、末流頗涉傳會。何注又復奧穢。左傳立學最晚。漢人師說寥寥。惟杜注行世。世人以其事博辭富、求傳而不求經。故公羊家理密而事疎。左傳家事詳而理畧。非謂左氏。謂治左氏者耳。穀梁師說久微。見隋書經籍志。國朝人治者亦少。學者於春秋、若謂事事能得聖心、談何容易。至周易、統貫天人、成於四聖。理須後聖、方能洞曉。京孟虞鄭諸大師、以及後代諸家、皆止各道所得、見仁見知、從無一人能爲的解定論。勢使然也。且陰陽無形。即使繆稱妄說、無人能質其非。所以通者雖少、而注者最多。演圖比象、任意紛紜。所謂畫狗馬難於畫鬼神之比也。總之、詩禮可解。尚書之文、春秋之義、不能盡解。周易則通儒畢生探索、終是解者少而不解者多。故治經次第、自近及遠、自顯通微。如

此爲便。較有實效。蜀士好談易、動輒著書、大不可也。切宜戒之。尹吉甫之詩曰、古訓是式、威儀是力。古訓、詩學也。威儀、禮學也。此古人爲學之方也。試考春秋時、幾無人不誦詩、學禮。僞世尚書者已較少。至於周易、除卜筮外、談者無多。意亦可知。三代時、易不以教學傳。惟太史公之、今賴有繫傳、或可窺見一斑耳。

非謂此經精通、方讀彼經。謂淺顯者未明、則深奧者不必妄加穿鑿、橫生臆見。津梁既得、則各視性之所近、深造致精可也。治詩禮、可不兼三經。治三經必涉詩禮。

【書き下し】

經を治むるには宜しく次第有るべし。

先師旌德の呂文節、不佞に教へて曰く、「注疏の工夫を用ひんと欲すれば、先づ『毛詩』を看よ。次に三禮に及び、再び他經に及べ」と。其の説至て精なり。請ふ其の義を申べん。蓋し『詩』『禮』は兩端にして、最も人事に切なり。義理は他經に較べて顯と爲し、訓詁は他經に較べて詳と爲す。其の中の名物を言ふや、學ぶ者能く達するや否や、較然として見易し。且つ四經は皆是れ鄭君玄の注にして、完全にして闕無し。『詩』は則ち毛傳粹然として、西漢經師の遺文と爲す。更に得易からず。古訓に通ぜんと欲すれば尤も茲に在り。古人の訓詁は、乍ち讀めば不慣を覺ゆるに似たり。此に於て冰釋理順するに非ざれば、解經終に是れ隔障たり。禮の條目は頗る多し。卷帙も亦鉅し。初學は難きを畏る。詩義は比興を該ね、兼ねて性靈を開發するを得。鄭箋は多く禮制に及ぶ。此の經既に通ずれば、其れ禮學に於て、途を尋ねて探求し、自ら已む能はず。『詩』『禮』兼ね明らかにして、他經方めて手を著く可し。『書』は政事を道ひ、『春秋』は名分を道ふ。典禮既に行はれて、然る後に政事・名分は、得て言ふ可きなり。尚書家の伏生、左傳家の賈生、公羊家の董膠西、何劭公は、皆禮學に精なり。其の書を案すれば知る可し。『易』の道は深微、語は簡、文は古。訓詁・禮制は他經に在りては精と爲し、『易』に在りては粗と爲す。所謂至精は乃ち陰陽の變化消息に在り。然れども其の粗なる者を得るに非ざれば、其の精なる者に遇ふに由無し。此れ姚姬傳、古文を學ぶの法を論ず。之を援きて以て『易』を治

むるの法と爲す。精なる者は遇ふ可くして鑿^{さう}可からず。鑿^{さう}では則ち妄なり。三禮の中、『儀禮』
『禮記』を先にし、『周禮』を次にす。『儀禮』は句碎し字實なり。讀み難きも能
く解し、記し難きも曉^さらかなり易し。注家最も少なく、異説も多くは無し。好き
は『禮記』一書に在り。即ち是れ外傳なり。『禮記』は『儀禮』より難し。『儀禮』は十七
件の事に止まり、『禮記』の事は多し。特だ其の文條^{ぶんじょう}するのみ。『周禮』は門類較^{くら}や多し。事
理更に博大と爲す。漢人の説く者も亦少なし。晚出の故なり。故に較^{くら}や難し。然れ
ども鄭注及び國朝人の零星たる解説も、亦已^{いは}だ明白なり。『尚書』は辭義既に古
し。隸古傳寫し、通借譌誤^{わうご}す。漢初より即ち今古文の兩家有りて、文を異にし讀
を岐^かる。此れは眞古文を謂ふ。蔡傳云ふ所の「今文無し、古文有り」の古文に非ざるなり。西晉
に梅氏の古文晚出し、唐初に僞孔傳專行するに至りて、六朝江左には即ち盛行するも
未だ一尊を定めざるのみ。漢代の今古文兩家の經傳、一時に俱に絶ゆ。故に尤も通じ
難し。『春秋』は乃ち聖人世を治むるの大權にして、文を微にして義を隱^{かく}す。本、
家人の言語に同じきに非ず。『史記』明らかに之を言ふ。三傳並びに立つるも、旨趣各
おの異なる。公羊家の師説は多きと雖も、末流は頗る傳會に涉る。何注も又復た
奥樸なり。『左傳』は學に立つること最も晚し。漢人の師説は寥寥たり。惟だ杜
注のみ世に行はる。世人は、其の事は博、辭は富なるを以て、傳を求めて經を求
めず。故に公羊家は理密にして事は疎なり。左傳家は事は詳らかにして理は畧な
り。『左氏』を謂ふに非ず。『左氏』を治むる者を謂ふのみ。『穀梁』の師説は久しく微なり。
『附書』經籍志に見ゆ。國朝人の治むる者も亦少なし。學ぶ者『春秋』に於て、若し
事事能く聖心得と謂へば、談何ぞ容易ならん。『周易』に至りては、天人を統
貫し、四聖に成る。理は後聖を須^{もと}ちて、方めて能く洞曉たり。京・孟・虞・鄭の
諸大師、以て後代の諸家に及ぶまで、皆止だ各おの得る所を道ひ、仁を見、知を
見、從^{したが}一人として能く解定論を爲す無し。勢ひの然らしむるなり。且つ陰陽
は形無し。即^{すな}ひ繆稱妄説せしむるも、人能く其の非を質^たす無し。通ずる者少なし
と雖も、注する者最も多き所以なり。演圖比象は意に任せて紛紜^{ふん}す。所謂「狗馬
を畫くは鬼神を畫くより難し」の比なり。之を總するに、『詩』『禮』は解す可し。

『尚書』の文、『春秋』の義は、盡くは解する能はず。『周易』は則ち通儒畢生探
索するも、終に是れ解する者少なくて解せざる者多し。故に經を治むるの次第
は、近より遠に及び、顯より微に通ず。此の如きを便と爲し、較^{くら}や實獲有り。蜀
士、好んで『易』を談じ、動もすれば輒^さち書を著すは、大いに可ならざるなり。切に宜しく之を戒し
むべし。尹吉甫の『詩』に、「古訓は是れ式、威儀は是れ力」と曰ふ。「古訓」は詩
學なり。「威儀」は禮學なり。此れ古人、學を爲すの方なり。試みに春秋の時を考する
に、幾んど人として『詩』を誦し、『禮』を學ばざる無し。『尚書』を傳^{でん}する者已に較^{くら}や少なし。『周
易』に至りては、卜筮を除きての外、談する者多くは無し。意亦知る可し。三代の時、『易』は以て
學^{がく}に教へず。惟だ太史のみ之を掌る。今繁傳有るに賴りて、或いは一斑を窺ひ見る可きのみ。
此の經精通して、方めて彼の經を讀むと謂ふに非ず。淺顯なる者未だ明らかなら
ざれば、則ち深奥なる者は必ずしも妄りに穿鑿を加へ、横^{よこ}まに臆見を生ぜざ
るを謂ふ。津梁^{しんりやう}既に得れば、則ち各おの性の近き所を視て、深く造りて精を致
して可なり。『詩』『禮』を治むるには、三經を兼ねざる可し。三經を治むるには
必ず『詩』『禮』に涉る。

【註】

○呂文節 呂賢基のこと。旌德の人。字は鶴田。文節は諡。道光の進士。

○姚姬傳が古文を學ぶ方法を論じたもの 姚鼐の『古文辭類纂』序目に「學者之於
古人、必始而遇其粗、中而遇其精、終則御其精者而遺其粗者」（學ぶ者の古人に
於けるや、必ず始めは而ち其の粗に遇ひ、中ころは而ち其の精に遇ひ、終りは
則ち其の精なる者を御して其の粗なる者を遺る）とある。

○眞古文 伏生が伝えた古文尚書二十八篇をいう。晉の永嘉の乱に滅び、『左傳』『國
語』『禮記』『孟子』などに引用されたものが残るだけである。

○蔡傳云ふ所の「今文無し、古文有り」の古文に非ざるなり 「蔡傳」は蔡沈「書
集傳」をいう。蔡傳では各篇の篇名の下にそれぞれ「今文無、古文有」「今文古
文皆有」と注しており、この「古文」は晉の元帝の時に梅賾が奏上した孔傳古文

尚書を指す。いわゆる偽古文のことである。

○本、家人の言語に同じきに非ず。「家人」は奴僕、しもべのこと。漢の韓固生は詩を治め、孝景の時に博士となった。竇太后は老子の書を好み、韓固生を召して老子の書について尋ねた。韓固生は、「此れは是れ家人の言（とるにたりない奴僕のことば）のみ」と答えたので、太后は怒って韓固生を檻に閉じ込めて笞を刺させた『史記』儒林列傳とある。

○『隋書』經籍志に見ゆ『隋書』經籍志に「至隋、杜氏盛行、服義及公羊、穀梁浸微、今殆無師說」（隋に至りて、杜氏盛行し、服の義及び公羊、穀梁浸く微にして、今殆んど師說無し）とある。

○四聖 伏羲・文王・周公・孔子の四人を指す。『易』は、伏羲が八卦を画し、文王がこれを演べて六十四卦とし、周公が彖辭と文辭を作り、孔子が十翼を作ったといわれている。

○「狗馬を畫くは鬼神を畫くより難し」 鬼神は誰も見たことがないのでために描いてもどこがまちがっているかわからないが、犬や馬は見慣れていて、まちがって描かれていると気がつくので、描くのが難しいということ。『後漢書』卷五十九張衡傳に「譬へば猶ほ畫工のことし。大馬を圖くを惡み、好んで鬼魅を作る。誠に實事は形はし難くして、虚偽は窮めざるを以てなり」（譬猶畫工。惡圖大馬、好作鬼魅。誠以實事難形、而虚偽不窮也）とあり、その李賢注に「韓子曰く、客に齊王の爲に畫く者あり。問ふ、畫は孰れか難き。對へて曰く、狗馬最も難し。孰れか易き。鬼魅最も易し。狗馬は人の知る所なり。故に難し。鬼魅は形無し。故に易きなり」（韓子曰く、客爲齊王畫者。問、畫孰難。對曰、狗馬最難。孰易。鬼魅最易。狗馬、人所知也。故難。鬼魅無形。故易也）を引く。また『歷代名畫記』卷一、論畫六法にも「故に韓子曰く、狗馬は難く、鬼神は易し。狗馬は乃ち凡俗の見る所なり。鬼神は乃ち謠怪の狀なり」（故韓子曰く、狗馬難、鬼神易。狗馬乃凡俗所見。鬼神乃謠怪之狀）を引く。

○尹吉甫の『詩』 『詩經』大雅・蕩之什・烝民を指す。その序に「烝民は尹吉甫、

宣王を美むるなり。賢に任じ能を使ふ。周室中興す」とあり、尹吉甫が宣王を褒めた詩である。その二章に「仲山甫之徳。柔嘉維則。令儀令色。小心翼翼。古訓是式、威儀是力。天子是若。明命使賦」（仲山甫の徳。柔嘉維れ則る。儀を令くし色を令くし、小心翼翼。古訓は是れ式、威儀は是れ力。天子は若ひ、明命賦せしむ）とある。

○この一段はほぼ全文『經解入門』平日讀經課程第五十一を引用している。

一治經宜有次第。既爲經學、必當先讀十三經注疏。注疏繁重、畢竟從何處入手。曰、先讀毛詩。次及三禮、次及他經。蓋詩禮兩端、最切人事。義理較他經爲顯。訓詁較他經爲詳。其中言名物、學者能達與否、較然易見。且四經皆是鄭君玄注、完全無闕。詩則毛傳粹然、爲西漢經師遺文。更不易得。欲通古訓、尤在於茲。古人訓詁、乍讀似覺不情。非於此冰釋理順、解經終是隔闕。禮之條目頗多。卷帙亦鉅。初學畏難。詩義該比興、兼得開發性靈。鄭箋多及禮制。此經既通、於禮學、尋途探求、自不能已。詩禮兼明、他經方可著手。書道政事、春秋道名分。典禮既行、然後政事名分、可得而言也。尚書家伏生、左傳家賈生、公羊家董膠西、何邵公、皆精於禮學。案其書可知。易道深微、語簡文古。訓詁禮制、在他經爲精、在易爲粗。所爲至精乃在陰陽變化消息。然非得其粗者、無由遇其精者。此姚姬傳論學古文法、援之以爲治易法。精者可遇而不可鑿。鑿則妄矣。三禮之中、先儀禮、禮記、次周禮。儀禮句碎字實。難讀能解。難記易曉。注家最少、異說無多。好在禮記一書。即是外傳。禮記難於儀禮。儀禮止十七件事、禮記之事多矣。特其文條遠耳。周禮門類較多。事理更爲博大。漢人說者亦少。晚出之故。故較難。然鄭注及國朝人零星解說、亦已明白。尚書辭義既古。隸古傳寫、通借譌誤。自漢初即有今古文兩家、異文歧讀。此謂真古文。非纂傳所云文無、古文有之古文也。至西晉梅氏古文晚出、唐初僞孔傳專行。六朝、江左即盛行、未定一尊耳。而漢代今古兩家之經傳、一時俱絕。故尤難通。春秋乃聖人治世大權、微文隱義。本非同家人言語。史記明言之。三傳並立、旨趣各異。公羊家師說雖多、末流頗涉傳會。何注「又復興機。左傳立學最晚。漢人師說寥寥。惟杜注」行世。世人以其事博辭富、求傳而不求經。故公羊家理密而事疎。左傳家事詳而理略。非謂左氏、謂治左氏者耳。

穀梁師説久微。見隋書經籍志。國朝人治者亦少。學者於春秋、若謂事事能得聖心、談何容易。至周易、統貫天人、成於四聖。理須後聖、方能得曉。京孟虞鄭諸大師、以及後代諸家、皆止各道所得、見仁見知、從無一人能的解定論。勢使然也。且陰陽無形。即使謬稱妄説、無人能質其非。所以通者雖少、而注者最多。演圖比象、任意紛紜。所謂畫狗馬難於畫鬼神之比也。總之、詩禮可解。尚書之文、春秋之義、不能盡解。周易則通儒畢生探索、終是解者少而不解者多。故治經次第、自近及遠、由顯通微。如此爲便。較有實獲。尹吉甫之詩曰、古訓是式、威儀是力。古訓、詩學也。威儀、禮學也。此古人爲學之方也。試看春秋時、無人不誦詩、學禮。稱道尚書者已較少。至於周易、除卜筮外、談者無多。意亦可知。三代時、易不以教學傳、惟太史掌之。今輒有繁傳、或可窺見夫一斑耳。

（一）内は『經解入門』にはないが、『輟軒語』の本文を対照すると、脱文があると思われる。）

【通釈】

經を研究するには順序を経なければならぬ。

先師の旌徳の呂文節は私に「注疏の方法を応用しようと思えば、まづ『毛詩』を讀みなさい。次に三礼、それからその他の經におよびなさい」と教えてくださった。その説はきわめて精密なので、その意味を説明したい。思うに『詩』と『禮』は對極に位置するが、人事ともっとも密切に關連する。意味はほかの經にくらべてはつきりしており、訓詁はほかの經にくらべて詳細である。そのなかの名物について述べている部分は「學ぶものは氣が付いているかどうか」はつきりしてゐてわかりやすい。なおかつこの四つの經『詩』『禮記』『周禮』『儀禮』はいづれも鄭玄が注をつけており、（鄭玄の思想で統一されていて）完全で欠けたところがない。『詩』は毛傳が純粹な兩漢經師の遺文であり、ほかには得がたい。古訓に精通しようと思えば、この書がいちばんよい。古人の訓詁は一読すると人情味がないように感じるが、こゝで水が解けるように理解できなければ、經は結局表面的にしか理解できない。

礼の条目はすこぶる多く、巻帙も厚いので、初学者はそのむづかしさにおそれをいだく。詩義は比と興を兼ねそなえ、あわせて精神を開発することが出来る。鄭箋は制度に言及することが多いので、『詩經』に通じたならば、礼学に対しては順を追って探求し、やめられなくなる。『詩』と『禮』のふたつがいづれもはつきり理解できて、はじめてほかの經に手に範圍をひろげるのがよい。『書』は政事、『春秋』は名分について述べる。（詩と礼の）典礼が行われてはじめて政事や名分について語ることが出来る。尚書家の伏生（伏勝）、左傳家の賈生（賈逵）、公羊家の董膠西（董仲舒）、何劭公（何休）はいづれも礼学に精通している。これは彼らの著書を見ればわかる。

『易』の道は深遠で微妙、ことばは簡潔で文章は古い。訓詁と礼制についてはほかの經のほうが精密で、『易』は粗略である。いわゆる『易』の至精というものは陰陽の变化消息の中に存在する。しかし粗略なものが理解できなければ、精密なものに出会う手だてがない。これは姚鼐傳（姚鼐）が古文を學ぶ方法を論じた際に言ったことである。この一文を引いて『易』を研究する方法とする。精密なものには偶然に巡りあふことはできるが、強いて詮索することはできない。強いて詮索するとたまたまとなる。三礼のうちでは、『儀禮』『禮記』を先にし、『周禮』はあとでよい。『儀禮』は文章はくどいが、内容は充実し、讀みにくいがよく理解でき、記憶しにくいがわかりやすい。注釈家をもっとも少なく、異説も多くない。もっとも優れているのは『禮記』であり、『儀禮』に対する（外伝である。『禮記』は『儀禮』よりむづかしい。『儀禮』の事項は十七にとどまるが、『禮記』の事項は多い。ただ文章はのびのびしている。『周禮』は分類がややこまかく、事の道理はさらに広い。漢の人の解説も少ない。晚出なので。だからややむづかしい。しかし鄭注と清朝の人のわずかな解説だけでとてもよくわかる。『尚書』は言葉や意味が古く、隸書と古文で伝写され、通仮や誤りが多い。漢の初めから今文家と古文家があり、（両家によつて）文字が異なり、読み方も相違していた。これは真古文のことをいう。蔡伝がいう「今文無し、古文有り」の古文のことではない。西晉に梅氏の古文があとからあらわれ、唐初に偽孔伝だけが通行するようになって、六朝のころ、江左（長江下流の南唐）で流行したが、それだけが尊ばれたわけではない。漢代の今

文家と古文家の経伝は同時に断絶したので、とりわけ精通するのはむづかしい。『春秋』は聖人が世を治めた大権であり、文章をはつきり書かず、意味を言葉の裏にかくしている。本来は（『老子』のような）家人（奴僕）のことと同じものではない。『史記』がはつきりといっている。三伝はいずれも学官に立てられたが、趣旨はそれぞれ異なる。公羊家の師説は多いが、末流はすこぶる附会におちいった。何休注も深奥で素樸である。『左傳』は学官に立てられたのがいちばんおそい。漢の人の師説はわずかしかなが、杜預の注だけが世間にひろく通行した。『左傳』は事がひろく、言葉が豊富なので、世間の人は伝だけを読んで経を読まない。だから公羊家は理論は精密だが事は疎略、左傳家は事は詳細だが理論は簡略である。『左氏』そのものをいうのではない。『左氏』を研究するものをいう。『穀梁』の師説は長期にわたって衰退しており、『爾雅』經籍志に見える。清朝の人でも研究する人はすくない。学ぶ者が『春秋』に対して、（春秋に記載されている）あらゆる事がよく聖人の心を体得していると考えれば、話はなんと簡単なことか（実際はそう簡単ではない）。『周易』については、天と人をつらぬき、四聖（伏羲・文王・周公・孔子）によって完成した。道理は後世の聖人を待つてはじめて明らかにできる。京房・孟喜・虞翻・鄭玄の大師および後代の諸家は、いづれも自分が理解したことを述べるだけで、内容は各人によって異なり、これまで適解定論を提出したものはひとりもない。これは当然の成り行きである。そのうえ陰陽には形がなく、たとえまちがったことを言っていたとしても、その誤りをただせる人はいない。精通したものが少ないのに、注釈者もつともし多い理由である。演図比象については各自が好き勝手なことをいう。いわゆる「犬や馬を描くのは鬼神を描くのよりむづかしい」のたぐいである。要するに『詩』と『禮』は理解することはできない。『尚書』の文章と『春秋』の大義はすべてが理解できるわけではない。『周易』は通儒が一生かかって探索したとしても、結局理解できるものは少なく、理解できないものが多い。だから経を研究する順序は、近いものから遠いものにおよび、はつきりしたものからはつきりしないものに通じるのである。このよう

にするのが効率的であり、実際にえられるものが多い。蜀の学生が好んで『易』を語り、ややもすればすぐに書を著すのは、ほんとうによくない。絶対に戒むべきである。尹吉甫の『詩』に「古訓は是れ式、威儀は是れ力」とある。「古訓」とは詩学のこと、「威儀」とは礼学のことである。これは古人が学問を行う方法である。春秋の時のことを考えてみるに、そのころ『詩』を誦し、『禮』を学ばない人はいなかったが、『尚書』について言及するものは少なかつた。『周易』にいたっては卜筮以外、談ずるものは多くない。その理由はいわなくてもわかるであらう。三代の時には、『易』は子供には教えず、ただ太史だけが掌っていた。今繁傳・彙詳傳があることによって、その一斑を垣間みることができただけである。

（以上述べてきたことは）ひとつの経に精通してはじめてほかの経を説めといっているのではない。平易なことがはつきりわかっているなければ、深奥なことはむやみに穿鑿したり、勝手に意見を述べたりしないということをいっているのである。津梁（入り口）がえられれば、各自性格の近いところをみきわめ、深く精密なところをいたればよい。『詩』と『禮』を研究するには三經『易』『書』『春秋』をかねなくともよいが、三經を研究するにはかならず『詩』と『禮』を勉強しなければならない。

【書目答問】

・十三經注疏。共四百一十六卷。乾隆四年武英殿刻附考證本、同治十年廣州書局覆刻殿本、阮文達公元刻附校勘記本、明北監本、明毛晉汲古閣本。目列後。阮本最於學者有益。凡有關校勘處旁有一圈、依圈檢之、精妙全在於此。四川書坊翻刻阮本、謬謬太多、不可讀、且削去其圈、尤謬。明監、汲古本不善。

周易正義十卷、魏王弼、晉韓康伯注、唐孔穎達等正義。

尚書正義二十卷、舊題漢孔安國傳、唐孔穎達正義。

毛詩正義七十卷、漢毛亨傳、鄭玄箋、唐孔穎達正義。

周禮注疏四十二卷、漢鄭玄注、唐賈公彥疏。

儀禮注疏五十卷、漢鄭玄注、唐賈公彥疏。

- ・禮記正義六十三卷、漢鄭玄注、唐孔穎達正義。
- ・春秋左傳正義六十卷、晉杜預集解、唐孔穎達正義。
- ・春秋公羊傳注疏二十八卷、漢何休解詁、唐徐彥疏。
- ・春秋穀梁傳注疏二十卷、晉范甯集解、唐楊士助疏。
- ・尚書大傳定本八卷、漢伏勝、陳壽祺校注、廣州原刻本、古經解彙函重刻陳本、又雅雨堂本三卷。
- ・春秋繁露十七卷、漢董仲舒、戴震、盧文昭校、聚珍本、福本、抱經堂本。
- ・易義別錄十四卷、張惠言、孟喜、姚信、翟子元、蜀才、京房、陸績、干寶、馬融、宋衷、劉表、王肅、董遇、王虞、劉瓛、子夏。
- ・鄭氏易注十卷、漢鄭玄、盧見曾刻雅雨堂叢書輯本、又廣州刻古經解彙函本三卷、附補遺一卷。
- ・周易鄭注十二卷、丁杰輯補、陳春刻湖海樓叢書本。
- ・周易集解十七卷、唐李鼎祚、雅雨堂本、古經解彙函重刻盧本、明毛晉刻津逮秘書本、張海鵬照曠閣刻學津討源本、又明木瀆周氏刻本、仁和葉氏刻、周本、盧本附釋文。
- ・古文尚書疏證八卷、閻若璩、家刻本、吳氏天津本。
- ・尚書今古文注疏三十卷、孫星衍、平津館本、學海堂本、孫勝於王。
- ・尚書後案三十卷、王鳴盛、原刻單行本、學海堂本。
- ・毛詩傳疏三十卷、陳奐、單行本、叢書本。
- ・毛詩傳箋通釋三十二卷、馬瑞辰、道光十五年刻本。
- ・毛詩後箋三十卷、胡承珙、墨莊遺書本。
- ・毛詩稽古編三十卷、陳啓源、單行本、學海堂本。
- ・周禮疑義舉要七卷、江永、原刻本、守山閣本、學海堂本。
- ・周禮漢讀考六卷、段玉裁、經韻樓本、學海堂本。
- ・儀禮正義四十卷、胡培翬、沔陽陸氏蘇州刻本、內有十二卷楊大培補。
- ・儀禮漢讀考、段玉裁、經韻樓本、學海堂本。

- ・禮記集說一百六十卷、宋衛湜、通志堂本。
- ・續衛氏禮記集說一百卷、杭世駿、活字版本。
- ・禮記陳氏集說補正三十八卷、陸元輔代納蘭性德撰、通志堂本。
- ・禮記訓纂四十九卷、朱彬、咸豐元年刻本。
- ・春秋釋例十五卷、晉杜預、岱南閣校本、聚珍本、福本、又席氏掃葉山房本、古經解彙函本。
- ・左傳賈服注輯述二十卷、李貽德、餘姚朱氏刻本。
- ・春秋公羊通義十一卷、叙一卷、孔廣森、鄂軒所著書本、學海堂本。
- ・春秋正辭十三卷、莊存與、味經齋本、學海堂本。
- ・公羊何氏釋例十卷、劉逢祿、學海堂本。

9

治經貴通大義。通經所以致用。俗解臆測。執此忘彼。施諸世事。必至迂謬敗壞。若通古義。究原委。貫羣籍。則政事文章。處處有用。

每一經中、皆有大義數十百條。宜研究詳明、會通貫串、方為有益。若僅隨文訓解、一無心得、仍不得為通也。

考據自是要義。但關係義理者、必應博考詳辨、弗明弗措。若細碎事體、猝不能定、姑仍舊說、不必徒耗日力。

【書き下し】

經を治むるには大義に通ずるを貴ぶ。經に通ずるは用を致す所以なり。俗解臆測し、此を執りて彼を忘れ、諸を世事に施せば、必ず迂謬敗壞に至る。若し古義に通じ、原委を究め、羣籍を貫けば、則ち政事文章、處處用有り。

每一經中に皆大義數十百條有り。宜しく研究詳明し、會通貫串すべくして、方めて益有りと爲す。若し僅かに文に隨ひて訓解するのみにして、一に心得すること

無ければ、仍ほ通ずと爲すを得ざるなり。

考据は自ら是れ要義。但だ義理に關聯する者は、必ず應に博考詳辨し、明らかならざれば措かざるべし。細碎たる事體の、猝かに定むる能はざるが若きは、姑く舊説に仍り、必ずしも徒らに日力を耗さず。

【註】

○この一段はほぼ『經解入門』平日讀經課程第五十一からの引用。

一治經貫通大義。每一經中、皆有大義數十百條。宜研究詳明、會通貫串、方爲有益。若僅隨文訓解、一無心得、仍不得爲通也。又考据自是要義。但關繫義理者、必應博考詳辨、弗明弗措。若細碎事件、猝不能定、姑存舊説、不必徒耗日力。

【通釈】

經を研究するには大義に精通するのが大切である。經に精通するのは実用にいかすためである。通俗な解釈をし臆測し、ひとつのことに固執し、他のことを忘れたまま、世間のことに応用すれば、きつと間違いを犯し、失敗する。もし古義に精通し、本末をきわめ、たくさん書籍を貫通すれば、政事や文章をはじめとして、あらゆることに応用できる。

どの經にも数十条数百条の大義が存在している。詳細に研究し、理解貫通してはじめて有益となる。もし文にしたがつて読んで解釈するだけで、心から理解することがなければ、まだ精通したとはいえない。

考据はもちろん重要である。ただ意味内容に関するものはかならず詳細に考察し、明らかにしなければやめない。煩瑣な事柄で、すぐには確定できないようなことは、しばらく旧説にしたがつておいて、いたずらに時間をついやす必要はない。

一、讀史。(史を讀む)

宜讀正史。

史記、漢書、後漢書、三國志、晉書、宋書、齊書、梁書、陳書、魏書、北齊書、周書、隋書、南史、北史、舊唐書、新唐書、舊五代史、新五代史、宋史、遼史、金史、元史、明史、此廿四部爲正史。凡引据古人事實、先以正史爲憑、再及別史雜史。僅看坊本刪削綱鑑、不得言史學。

唐劉知幾史通、最爲史學樞要。必當先讀。國朝萬斯同歷代史表、沈炳震廿一史四譜、李兆洛紀元編、歷代地理今釋、王鳴盛十七史商榷、趙翼廿二史劄記、錢大昕廿二史考異、皆讀史者不可少之書。

【書き下し】

宜しく正史を讀むべし。

『史記』『漢書』『後漢書』『三國志』『晉書』『宋書』『齊書』『梁書』『陳書』『魏書』『北齊書』『周書』『隋書』『南史』『北史』『舊唐書』『新唐書』『舊五代史』『新五代史』『宋史』『遼史』『金史』『元史』『明史』此の廿四部を正史と爲す。凡そ古人の事實を引据するには、先づ正史を以て憑と爲し、再び別史・雜史に及ぶ。僅かに坊本の刪削せる『綱鑑』を看るのみにては、史學と言ふを得ず。

唐の劉知幾の『史通』は、最も史學の樞要と爲す。必ず當に先づ讀むべし。國朝の萬斯同の『歷代史表』、沈炳震の『廿一史四譜』、李兆洛の『紀元編』、『歷代地理今釋』、王鳴盛の『十七史商榷』、趙翼の『廿二史劄記』、錢大昕の『廿二史考異』は、皆史を讀む者の少く可からざるの書なり。

【通釈】

正史を讀みなさい。

『史記』『漢書』『後漢書』『三國志』『晉書』『宋書』『齊書』『梁書』『陳書』『魏書』

『北齊書』『周書』『隋書』『南史』『北史』『舊唐書』『新唐書』『舊五代史』『新五代史』『宋史』『遼史』『金史』『元史』『明史』、この二十四部が正史である。そもそも古人の事蹟を引用考証する場合、まづ正史をよりどころとし、それから別史や雜史に言及する。世間に流布する刪削された『資治綱鑑』を参照するだけでは史学とはいえない。

唐の劉知幾の『史通』は、史学の要衝である。まづさきに読まなければならない。清朝の萬斯同の『歷代史表』、沈炳震の『廿二史四譜』、李兆洛の『紀元編』、『歷代地理今釋』、王鳴盛の『十七史商榷』、趙翼の『廿二史劄記』、錢大昕の『廿二史考異』は、いづれも史書を読むものには欠くことのできない書物である。

【書目答問】

・欽定二十四史。乾隆間欽定。此二十四部皆爲正史、共三千二百四十三卷、目列後。正史撰人不録。

史記一百三十卷。晉裴駰集解、唐司馬貞索隱、唐張守節正義。汲古本、掃葉本無索隱、正義。

漢書一百二十卷。唐顏師古注。即宋慶元附三劉刊誤、宋祁校語本。明監本、汲古本、掃葉本無校語。

後漢書一百二十卷。唐章懷太子賢注。内志三十卷、晉司馬彪撰、梁劉昭注。

三國志六十五卷。宋裴松之注。

晉書一百三十卷。附唐何超音義三卷。

宋書一百卷。

南齊書五十九卷。

梁書五十六卷。

陳書三十六卷。

魏書一百一十四卷。

北齊書五十卷。

周書五十卷。

隋書八十五卷。

南史八十卷。

北史一百卷。

舊唐書二百卷。

新唐書二百二十五卷。明南監本附宋董衡釋音二十五卷。

舊五代史一百五十卷、目錄二卷。

新五代史記七十四卷、目錄一卷。宋徐無黨注。

宋史四百九十六卷。

遼史一百一十六卷。

金史一百三十五卷。

元史二百一十卷。

明史三百三十六卷。

武英殿附考證本、江寧、蘇州、揚州、杭州、武昌五書局合刻本、新會陳氏覆刻殿本。明南、北監本廿一史、斷自元止、無舊唐、舊五代。北監合刻、南監乃新舊版輾集而成、或別刻、或複刻。毛氏汲古閣本十七史、至新五代止、亦無舊唐、舊五代。席氏掃葉山房本、與毛本同、增舊唐、舊五代。北監本、掃葉本、陳氏本、坊翻毛本有脫誤。

・史通通釋二十卷。唐劉知幾。浦起龍釋。原刻本。黃叔琳史通訓故補二十卷、原刻本、亦可。

・歷代史表五十九卷。萬斯同。原刻足本、初印本少末六卷。錢大昕唐學士年表一卷、五代學士年表一卷、宋中興學士年表一卷、德清徐氏刻本。

・廿一史四譜五十四卷。沈炳震。海寧查氏刻本。

・歷代紀元編三卷。李兆洛。江寧官本、粵雅堂本。此書最便。

・歷代地理志韻編今釋二十卷。李兆洛。江寧官本。此書最便。

・十七史商榷一百卷。王鳴盛。原刻本。

・廿二史劄記三十六卷、趙翼、原刻本。
 ・廿二史考異一百卷、錢大昕、潛研堂本。李貽德十七史考異、未刊。

— 2 —

正史中宜先讀四史。

全史浩繁、從何說起。四史爲最要。史記、漢書、後漢、國志、四者之中、史記、前漢爲尤要。其要如何。語其高、則證經義、多古典、古言、古字、通史法。諸史義例、皆本馬班。語其卑、則古來詞章、無論駢散、凡雅詞麗藻、大半皆出其中。文章之美、無待於言。

諸史中、體例文筆、雖有高下、而其有益實用處、並無輕重之別。蓋一朝自有一朝之事蹟、一朝之典制、無可軒輊。且時代愈近者、愈切於用。非謂四史之外、可束高閣。四史外、新五代史最好。義例正大、文辭和雅。其疎處、前人已言之。新唐書志亦歐作。欽定明史、體例最精。

【書き下し】

正史中にては宜しく先づ四史を讀むべし。

全史は浩繁、何れより説き起さん。四史を最要と爲す。『史記』『漢書』『後漢』『國志』四者の中、『史記』『前漢』を尤も要と爲す。其の要如何。其の高きを語れば、則ち經義を證し、古典・古言・古字多し。史法に通づ。諸史の義例は皆馬・班に本づく。其の卑きを語れば、則ち古來の詞章、駢・散を論ずる無く、凡そ雅詞麗藻は、大半皆其の中に出づ。文章の美は言を待つ無し。

諸史中、體例文筆に、高下有りと雖も、而れども其の、實用に益有るの處、並びに輕重の別無し。蓋し一朝には自ら一朝の事蹟、一朝の典制有り、軒輊す可き無し。且つ時代愈いよ近き者は、愈いよ用に切なり。四史の外、高閣に束ぬ可しと謂ふに非ず。四史の外、『新五代史』最も好し。義例正大、文辭和雅なり。其の疎

なる處は、前人已に之を言ふ。『新唐書』の志も亦歐の作なり。『欽定明史』は體例最も精なり。

【註】

○其の疎なる處は、前人已に之を言ふ 『新五代史』の誤りを攻撃した專著には、宋の史續『五代史記纂誤』三卷、清の楊陸榮『五代史志疑』四卷などがある。

○この一段には『經解入門』經與史相表裏第二十一からの引用がある。

經與史異學、而古史多與經相表裏。故治經猶不可不讀史、史記、前後漢書、三國志、四史最要。司馬遷本得古文尚書之傳。故其書多古文說、而所搜輯多先秦故制、其書甚善。班史多古字古義、范書陳志雖不及前二種、而漢儒家法、地理事實足資考證。故讀史猶宜讀其表志、由此而讀二十四史。博而約之、存乎其人。爲治經計、如逸周書、國語、國策、山海經、竹書紀年、穆天子傳、晏子春秋、越絕書、吳越春秋、列女傳、新序、說苑、東觀漢記之屬、皆可歸入史部、皆不可以不讀。

【通釈】

正史のうちではまづ四史を讀まなければならない。

全史は(量が)膨大であり、なにかから説明すればよいのか。(二十四史のうちでは)四史『史記』『漢書』『後漢書』『三國志』がもっとも重要である。この四つのうちでは『史記』『前漢書』がとりわけ重要である。その重要性はどこにあるのか。高尚な点についていうと、經の意味を実証し、古典・古言・古字が多い。歴史法に通じる。諸史の義例はすべて司馬遷・班固に基づく。卑近な点についていうと、古來の詩や文章―駢文・散文に關係なく―のあらゆる美辭麗句はほとんどここから出ている。文章の美しさは言うまでもない。

各史には体例や文章に優劣はあるけれども、實用に有益であるという点に関して、輕重の差はない。思うにそれぞれの王朝にはその王朝特有の事蹟や典制が存在しており、優劣をつけることはできない。なおかつ時代が近ければ近いほど、實用

と密接に関連する。四史以外を高閣に積んでおいてよいといっているのではない。四史以外では『新五代史』がもつともすぐれている。義例が公明正大で、文章が上品である。粗略な点については前人がすでに言及している。『新唐書』の志も『新五代史』とおなじく歐陽脩の作である。『欽定明史』は体例がもつとも精密である。

【書目答問】

- ・史記一百三十卷。晉裴駰集解。唐司馬貞素隱。唐張守節正義。汲古本、掃葉本無索隱、正義。
- ・漢書一百二十卷。唐顏師古注。即宋慶元附三劉刊誤、宋祁校語本。明監本、汲古本、掃葉本無校語。
- ・後漢書一百二十卷。唐章懷太子賢注。內志三十卷。晉司馬彪撰、梁劉昭注。
- ・三國志六十五卷。宋裴松之注。
- ・新五代史記七十四卷。目錄一卷。宋徐無黨注。
- ・新唐書二百二十五卷。明南監本附宋董衡釋音二十五卷。
- ・明史三百三十六卷。

— 3 —

宜讀通鑑。

史學須漸次爲之、亦須窮年累月。若欲通知歷朝大勢、莫如資治通鑑及續通鑑。乃國朝絕沉痾、非指宋元明人所賴者。通鑑猶恐未能貫串、宜兼讀通鑑紀事本末、宋元明紀事本末。溫公自作通鑑目錄、簡便易尋。蘇州局刻。

【書き下し】

宜しく『通鑑』を読むべし。

史學は須く漸次之を爲すべし、亦須く年を窮め月を累めべし。若し歷朝の大勢に

通知せんと欲すれば、『資治通鑑』及び『續通鑑』乃ち國朝の墨沈の撰、宋元明人の續けし所の者を指すに非ず。に如くは莫し。『通鑑』は猶ほ未だ貫串する能はざるを恐るれば、宜しく兼ねて『通鑑紀事本末』『宋元明紀事本末』を読むべし。溫公自ら『通鑑目錄』を作る。簡便にして尋ね易し。蘇州局刻。

【通釈】

『資治通鑑』を説まなければならない。

史學は順を追って修得しなければならない、また長い年月をかけ（て身につけ）なければならぬ。もし歷代王朝の大勢を知ろうと思えば、『資治通鑑』および『續資治通鑑』前朝の墨沈の撰、宋元明人が續けて作つたものを指すのではない。におよぶものはない。『資治通鑑』は（大部なので）説破できないことが心配であれば、『通鑑紀事本末』『宋元明紀事本末』をあわせて読みなさい。司馬溫公司馬光はみづから『通鑑目錄』を作る。簡單便利で検索しやすい。蘇州局の刻本がある。

【書目答問】

- ・資治通鑑二百九十四卷。宋司馬光。元胡三省音注。胡克家仿元本、武昌局翻胡本。戰國至五代。
- ・通鑑考異三十卷。宋司馬光。通鑑全書附刻本、胡注本已將考異散附本書各條下。
- ・續資治通鑑三百二十卷。畢沅。原刻蘇州補印本。宋、元、明人續通鑑甚多、有此皆可廢。
- ・通鑑紀事本末四十二卷。宋袁樞。袁、陳、谷四種合刻通行本、漢陽朝宗書室活字版本、南昌局本未畢工。王延年補通鑑紀事本末、已進呈、未見傳本。
- ・宋史紀事本末二十六卷。明陳邦瞻。袁、陳、谷四種合刻通行本、漢陽朝宗書室活字版本、南昌局本未畢工。
- ・元史紀事本末四卷。明陳邦瞻。袁、陳、谷四種合刻通行本、漢陽朝宗書室活

字版本、南昌局本未畢工。

・明史紀事本末八十卷。谷應泰。袁、陳、谷四種合刻通行本、漢陽朝宗書室活字版本、南昌局本未畢工。

・通鑑目錄三十卷。宋司馬光。蘇州局翻宋本。體若表譜、以便尋檢通鑑。

— 4 —

宜讀通考。

三通並稱、然通志除二十客外、皆可不讀。二十客中、亦多不可據。通典甚精。多存古書古禮。於經學甚有益。若意在經濟、莫如文獻通考。詳博綜貫、尤便於用。中資者、儼若其卷帙繁重、則坊刻有文獻通考詳節一書。亦可先一瀏覽、畧得頭緒、然後從此問津。

【書き下し】

宜しく『通考』を読むべし。

三通並び稱さるるも、然れども『通志』は二十客を除きて外、皆讀まざる可し。二十客の中、亦多く據る可からず。『通典』は甚だ精なり。多く古書・古禮を存す。經學に於て甚だ益有り。若し意、經濟に在れば、『文獻通考』に如くは莫し。詳博綜貫にして、尤も用に便なり。中資なる者、儼し其の卷帙の繁重に苦しめば、則ち坊刻に『文獻通考詳節』の一書有り。亦先づ一まず瀏覽す可し、畧ぼ頭緒を得て、然る後に此れより津を問ふ。

【通釈】

『文獻通考』を読まなければならない。

三通『文獻通考』『通志』『通典』は並稱されるが、『通志』は二十略以外は読まなくてもよい。ただ二十略のうちにも読む必要のないものは多い。『通典』はと

ても精密であり、古書・古禮をたくさん保存している。經學に対してとても有益である。

もし經世濟民に志があるのであれば、『文獻通考』におよぶものはない。詳細で時代を貫いており、とりわけ実用に有益である。中ぐらいの資質のものが、卷帙の多さに苦しむのであれば、坊刻本に『文獻通考詳節』という書物がある。ひとまずこれを通覽しておおまかに見当をつけ、そこから勉強を始めなさい。

【書目答問】

・通志二百卷。宋鄭樵。明刻本、殿本三通合刻、謝刻本、廣州重刻本。
・通典二百卷。唐杜佑。明刻本、殿本三通合刻、崇仁謝氏合刻本、廣州重刻本。
・通考三百四十八卷。元馬端臨。明刻本、殿本三通合刻、謝刻本、廣州重刻本。
・文獻通考詳節。嚴虞惇。

— 5 —

史學亦宜專精一種。

覽雖宜博、欲求精熟、則亦貴專攻。但能精熟一二種足矣。隋劉臻、精於兩漢書。人稱漢聖。宋范祖禹、熟唐事、著唐鑑。人稱唐鑑公。國初馬驥、熟三代事、撰綱史。人稱馬三代。此古人爲史學之法也。蘇文忠讀史、有八面受敵法。謂事蹟典制文章諸門、每讀一次、專尋一端。亦可則效。

【書き下し】

史學も亦宜しく専ら一種に精なるべし。

覽ること宜しく博なるべしと雖も、精熟を求めんと欲すれば、則ち亦專攻を貴ぶ。但だ能く一二種に精熟すれば足る。隋の劉臻、兩『漢書』に精なり。人、漢聖と稱す。宋の范祖禹、唐の事に熟し、『唐鑑』を著はす。人、唐鑑公と稱す。國初の馬驥は三代の事に熟し、『綱史』を撰す。人、馬三代と稱す。此れ古人、史學

を爲すの法なり。蘇文忠、史を讀むに、八面敵を受くるの法有り。事蹟・典制・文章の諸門、讀むこと一次なる毎に、専ら一端を尋ぬるを謂ふ。亦則效す可し。

【註】

○蘇文忠、史を讀むに、八面敵を受くるの法 蘇文忠は蘇軾のこと。方大鎮『田居乙記』潛見第一・記學に蘇軾の讀書法を記して、「有人問蘇文忠公曰、公之博洽可學乎。曰、可。吾讀漢書蓋數過而始盡之。如治道、人物、地理、官制、兵法、貨財之類、每一過博求一事、不待數過而事事精覈矣。參伍錯綜、八面受敵、沛然應之而莫禦焉」（人、蘇文忠公に問ふ有り、曰く、公の博洽學ぶ可きか。曰く、可なり。吾れ漢書を讀むこと蓋し數過にして始めて之を盡す。如へば治道、人物、地理、官制、兵法、貨財の類、一過する毎に博く一事を求むれば、數過を待たずして事事精覈なり。參伍錯綜し、八面敵を受くるも、沛然として之に應じて禦ぐ莫し）という。

【通釈】

史學も（經學と同じく）ひとつの事に精通しなければならない。

見聞は広くなければならないが、精熟を求めるのであれば、やはり專攻が大切である。ただひとつかふたつの史書に精熟できれば充分である。隋の劉臻は兩『漢書』に精通していたので、人は彼を漢聖と呼んだ。宋の范祖禹は唐の事蹟に精熟し、『唐鑑』を著わしたので、人は彼を唐鑑公と呼んだ。清初の馬驥は三代の事蹟に精熟し、『釋史』を著わしたので、人は彼を馬三代と呼んだ。これが古人が史學を修得する方法である。蘇文忠（蘇軾）は歴史書を読むにあたって、八つの方面に敵を迎え討つという方法で讀んだ。これは事蹟・典制・文章の各部門について、一度讀むたびに、ひとつの部門を集中的に探究しながら讀むことをいう。この方法をまねるとよい。

【書目答問】

- ・唐鑑二十四卷。宋范祖禹。呂祖謙注。明刻本、成都局本、武昌局本。
- ・釋史一百六十卷。馬驥。通行本。
- ・東坡七集一百一十卷。宋蘇軾。集四十卷、後集二十卷、奏議十五卷、內制集十卷、外制附樂語三卷、應詔集十卷、續集十二卷。明成化四年江西布政司重刻宋本、嘉靖十三年江西布政司又重刻、此本爲最古、又大全集本一百三十卷、分體編次、易於檢尋、明刻今刻多有。
- ・蘇詩合注五十卷、附錄五卷。馮應榴注。自刻本。蘇詩、宋施元之注最 有名、查慎行補注亦善。馮、王、翁三注更詳備。
- ・蘇詩編注集成總案四十五卷、詩四十六卷、雜綴一卷。王文誥注。自刻本。馮詳事實、王兼論詩。
- ・蘇詩補注八卷。翁方綱注。蘇齋叢書本、粵雅堂本。

— 6 —

讀史宜讀表志。欽定遼金元三史國語解、讀此三史者最要。

作史以作志爲最難。讀史以讀志爲最要。一代典章制度、皆在其中。止看列傳數篇、於史學無當也。除三史外、隋書經籍志、新唐地理志、明史歷志、皆要。表亦史家要領、可訂歲月之誤、兼補記傳之闕。簡賈無情、人所厭觀。先覽大概、用時檢之。

【書き下し】

史を讀むには宜しく表・志を讀むべし。『欽定遼金元三史國語解』は、此の三史を讀む者最も要なり。

史を作るは志を作るを以て最も難しと爲す。史を讀むは志を讀むを以て最も要と爲す。一代の典章・制度は皆其の中に在り。止だ列傳數篇を看るのみは、史學に於て當る無きなり。三史を除くの外、『隋書』經籍志、『新唐』地理志、『明史』歷志、皆要なり。

表も亦史家の要領にして、歳月の誤りを訂し、兼ねて記傳の闕を補ふ可し。簡質にして情無きは、人の觀るを厭ふ所なり。先づ大概を覽、用ふる時に之を檢せよ。

【註】

○この一段には『經解入門』經與史相表裏第二十一からの引用がある。

經與史異學、而古史多與經相表裏。故治經猶不可不讀史、史記、前後漢書、三國志、四史最要。司馬遷本得古文尚書之傳。故其書多古文說、而所搜輯多先秦故制、其書甚善。班史多古字古義、范書陳志雖不及前二種、而漢儒家法、地理事實足資考證。故讀史猶宜讀其表志、由此而讀二十四史。博而約之、存乎其人。爲治經計、如逸周書、國語、國策、山海經、竹書紀年、穆天子傳、晏子春秋、越絕書、吳越春秋、列女傳、新序、說苑、東觀漢記之屬、皆可歸入史部、皆不可以不讀。

【通釈】

史書を読むには表・志を読まなければならない。『欽定遼金元三史國語解』は、この三史を讀むものにはもつとも重要である。

史書を作る場合、志を作るのがもつともむづかしい。史書を読む場合、志を読むのがもつとも重要である。一代の典章・制度はすべてその中に含まれている。ただ列伝数篇をみるだけでは、史学に該当しない。三史以外では、『隋書』經籍志、『新唐書』地理志、『明史』歴志がいつも重要である。表もやはり歴史家の要領であり、歳月の誤りを訂正し、あわせて記傳の闕を補うことができる。簡潔で感情のないものは、人は見るのをいやがるものである。まづ（表で史書の）あらましを縦覧し、（史書を利用する際に）検索しなさい。

【書目答問】

・遼金元三史國語解四十六卷。乾隆四十六年敕撰。殿本。宋、遼、金、元史原書譯語不合者、殿本四史奉敕改正。

・隋書八十五卷。
・新唐書三百二十五卷。明南監本附宋董衡釋音二十五卷。
・明史三百三十六卷。

— 7 —

讀史忌妄議論古人賢否古事得失。

事實詳確、善惡自分。首尾貫通、得失乃見。若不詳年月、不考地理、不明制度、不揣時勢、妄論苛求、橫生褒貶、則舛誤顛倒、徒供後人訕笑耳。讀史者貴能詳考事蹟。古人作用言論、推求盛衰之倚伏、政治之沿革、時勢之輕重、風氣之變遷、爲其可以益人神智、遇事見諸設施耳。古人往矣、豈勞後人爲之讞獄注考哉。胡致堂論史不可爲法。

【書き下し】

史を讀むには妄りに古人の賢否・古事の得失を議論するを忌む。

事實詳確なれば、善惡自ら分る。首尾貫通すれば、得失乃ち見はる。若し年月に詳らかならず、地理を考せず、制度に明らかならず、時勢を揣らず、妄りに論じ苛しく求め、横（よこ）まに褒貶を生ずれば、則ち舛誤顛倒し、徒らに後人の訕笑を供するのみ。史を讀む者は能く事蹟を詳考するを貴ぶ。古人の作用言論は、盛衰の倚伏・政治の沿革・時勢の輕重・風氣の變遷を推求して、其れ以て人の神智を益し、事に遇ひて諸を設施に見はす可きが爲のみ。古人往けり、豈に後人を勞して之が讞獄注考を爲さんや。胡致堂の論史は法と爲す可からず。

【註】

○胡致堂 宋の思想家。名は寅、字は明仲。致堂は号である。『春秋胡氏傳』を作った胡安國の子で、『讀史管見』の著がある。父安國の説を受け、より過激な異

民族排撃の論を展開する。

【通釈】

史書を読むにはみだりに古人の賢否・古事の得失を議論しないようにしなさい。

事実が詳細であれば、善悪はおのづとはつきりし、首尾が貫通すれば、得失は自然にあらわれる。もし年月に詳しくなく、地理を考えず、制度に明るくなく、時勢を考えず、でたらめに議論し、きびしく要求し、勝手に褒貶を議論すれば、舛誤顛倒し、いたずらに後人の笑いを買っただけである。史を読むものは事蹟を詳細に考察することが大切である。古人の行動や言論は、盛衰の關係・政治の變遷・時勢の輕重・風俗の變化を推求して、人智を広くし、同じ事件に遭遇したときに、その事件に（古人の行動や言論を）応用できるようにするためにものにすぎない。古人はもういない、どうして後人に彼らの批難や評價を行わせる労苦をかけるのか。胡致堂（胡庶）の論史は手本としてはならない。

— 8 —

讀史忌批評文章。

明人惡習、不惟史漢但論其文、即周禮三傳孟子、亦以評點時文之法批之。鄙陋侮經、莫甚於此。切宜痛戒。史漢之文法筆、原當討究效法。然以後生俗士、管見俚語、公然標之簡端、大不可也。卷端止可著校勘考證語。若有討論文法處、止可別紙記之。讀諸子同。

【書き下し】

史を読むには文章を批評するを忌む。

明人の惡習は、惟だに『史』『漢』但だ其の文を論ずるのみならず、即ち『周禮』『三傳』『孟子』も、亦時文を評點するの法を以て之を批す。鄙陋にして經を侮

ること、此より甚だしきは莫し。切に宜しく痛戒すべし。『史』『漢』の文法・文筆は、原と當に討究效法すべし。然れども後生の俗士の、管見俚語を以て、公然として之を簡端に標するは、大いに可ならざるなり。卷端には止だ校勘考證の語を著す可し。若し文法を討論するの處有れば、止だ別紙に之を記す可きのみ。諸子を読むも同じ。

【通釈】

史書を読むには文章を批評しないようにしなさい。

明の人の惡習は、『史記』『漢書』の文章を議論するだけではなく、『周禮』『三傳』『孟子』さえも時文を評點する方法で批評することである。これは見識が低く、これほど經書を侮蔑するものはない。絶対に戒しめるべきである。『史記』『漢書』の文法や文章は、もちろん検討研究すべきである。しかし後生の俗士が狭い見解や卑俗な言葉を持ちいて、公然と簡端に書き記すのは、まったくよくない。卷端には校勘考證の言葉だけを書き記すべきである。もし文法を討論する箇所があれば、別紙に書き記すべきである。諸子を読む場合も同じ。

【書目答問】

- ・ 史記一百三十卷、晉裴駰集解、唐司馬貞素隱、唐張守節正義、汲古本、掃葉本無索隱、正義。
- ・ 漢書一百二十卷、唐顏師古注、即宋慶元附三劉刊誤、宋祁校語本。明監本、汲古本、掃葉本無校語。
- ・ 周禮注疏四十二卷、漢鄭玄注、唐賈公彥疏。
- ・ 春秋左傳正義六十卷、晉杜預集解、唐孔穎達正義。
- ・ 春秋公羊傳注疏二十八卷、漢何休解詁、唐徐彥疏。
- ・ 春秋穀梁傳注疏二十卷、晉范甯集解、唐楊士勛疏。
- ・ 孟子注疏十四卷、漢趙岐注、舊題宋孫奭疏。

一、讀諸子。(諸子を讀む)

— 1 —

讀子爲通經。以子證經、漢王仲任已發此義。

子有益於經者三。一、證佐事實。一、證補諸經譌文佚文。一、兼通古訓古音韻。然此爲周秦諸子言也、漢魏亦頗有之。至其義理、雖不免偏駁、亦多有合於經義、可相發明者。宜辨其眞僞、別其瑜瑕、斯可矣。唐以後子部書最雜。不可同年而語。

【書き下し】

子を讀むは經に通ずるが爲なり。子を以て經を證するは、漢の王仲任已に此の義を發す。

子の、經に益有る者は三。一、事實を證佐す。一、諸經の譌文・佚文を證補す。一、古訓・古音韻に兼ね通ず。然れども此れは周秦の諸子の爲に言ふも、漢魏も亦頗る之れ有り。其の義理に至りては、偏駁を免れずと雖も、亦多く經義に合し、相發明す可き者有り。宜しく其の眞僞を辨じ、其の瑜瑕を別つべくして、斯ち可なり。唐以後の子部の書は最も雜なり。年を同じくして語る可からず。

【註】

○王仲任已に此の義を發す 王仲任は王充のこと。その『論衡』書解篇に、「今五經遭亡秦之奢侈、觸李斯之橫議、燔燒禁防。伏生之(休)〔徒〕、抱經深藏。漢興、收五經、經書缺滅而不明、篇章棄散而不具。墨錯之輩、各以私意、分拆文字、師徒相因相授、不知何者爲是。亡秦無道、敗亂之也。秦雖無道、不燔諸子。諸子尺書、文篇具在、可觀讀以正說、可採掇以示後人。……由此言之、書亦爲本、經亦爲末。末失事實、本得道實。折累二者、孰爲玉屑。知屋漏者在宇下、知政失者在草野、知經誤者在諸子。諸子尺書、文明實是」(今五經は亡秦の奢侈に遭ひ、李

斯の横議に觸れ、燔燒禁防せらる。伏生の徒、經を抱き深く藏る。漢興りて、五經を收むるも、經書缺滅して明らかならず、篇章棄散して具はらず。墨錯の輩、各々の私意を以て、文字を分拆し、師徒相因り相授け、何者を是と爲すかを知らず。亡秦無道にして、之を敗亂すればなり。秦は無道なりと雖も、諸子を燔かざれば。諸子の尺書は、文篇具に在れば、觀讀して以て說を正す可く、採掇して以て後人に示す可し。……此れに由りて之を言へば、書も亦本たり、經も亦末たり。末、事實を失ひ、本、道實を得たり。二者を折累するに、孰れか玉屑と爲す。屋漏を知る者は宇下に在り、政失を知る者は草野に在り、經誤を知る者は諸子に在り。諸子の尺書は、文明らかに實是なり」とある。

○この一段には『經解入門』經與子相表裏第二十からの引用がある。

周秦諸子。皆與經相出入。如管子之治術、司馬之兵法、墨子之引書、荀子之傳詩、皆得經之古義。而讀者取其事實、可以補證經傳之簡略。知其旨歸、可以補證經傳之譌文佚文。知其古訓古音、可以訂經傳音注之得失、即漢魏諸子亦然。蓋漢魏去古未遠、微言大義、猶未絕於人間。故其義理雖純雜不一、而所以發明經義、仍瑕不掩瑜、與唐以後所謂子部者大別。惟讀之宜以細心、務在先求訓詁、必使確實可解。勿徒空論其文、臆度其理。即如莊子寓言、多烏有子虛之事。而其文字名物、情物理、猥瑣纖末之事、經史所不能盡者、子部無乎不有。其趣妙處、較之經史、尤易引人入勝。以經學家實事求是之法讀之、斯其益無限。因取先秦以上傳記、子史及解經之書、古人通名傳記。眞出古人之手、及漢魏著述中理者、約舉其名于後。俾學者知所趨焉。

【通釈】

諸子を説むのは經書に精通するためである。諸子で經書を証明することは、漢の王仲任(王充)がすでにこの意味を指摘している。

諸子が經書に対して有益な点は三つある。一、(經書の)事實を証明することが

できる。一、經書の謬文や佚文を証明補充することができる。一、古訓や古音韻に精通することができる。これは周秦の諸子のために言っているのであるが、漢魏（の諸子）に対してもあてはまる。（漢魏の諸子は）義理に關しては、偏向をまぬがれないが、經書の義に合致し、たがいに明らかにしあえる部分がたくさんある。真偽をわかし、長所短所をはっきり區別できれば、それでよい。唐以後の子部の書はもつとも雑多であり、（周秦の諸子と）同列に語ることとはできない。

【書目答問】

・論衡三十卷、漢王充。 明刻單行本、漢魏叢書本。

— 2 —

讀子宜求訓詁看古注。

諸子、道術不同、體製各別。然讀之亦有法。首在先求訓詁、務使確實可解。切不可空論其文、臆度其理。如俗本莊子因、楚辭燈、管子評注之類、最害事。即如莊子寓言、謂其事多烏有耳。至其文字名物、仍是鑿鑿可解、文從字順。豈有著書傳後、故令其語在可曉不可曉之間者乎。以經學家實事求是之法讀子、其益無限。大抵天地間、人情物理、下至猥瑣纖末之事、經史所不能盡者、子部無不有之。其趣妙處、較之經史、尤易引人入勝。故不讀子、不知瓦礫糠粃、無非至道。不讀子、不知文章之面目、變化百出、莫可端倪也。今人學古文以爲古文、唐宋巨公、學諸子以爲古文。此古文学家秘奧、此其益人、又有在於表裏經史之外者矣。

【書き下し】

子を讀むには宜しく訓詁を求め古注を見るべし。

諸子、道術同じからず、體製各おの別なり。然れども之を讀むも亦法有り。首めは先づ訓詁を求め、務めて確實解す可からしむるに在り。切に其の文を空論し、

其の理を臆度す可からず。俗本の『莊子因』『楚辭燈』『管子評注』の如きの類、最も事に害あり。即ち『莊子』の寓言の如きは、其の事烏有多しと謂ふのみ。其の文字・名物に至りては、仍ほ是れ鑿鑿として解す可く、文從ひ字順ふ。豈に書を著はし後に傳へ、故らに其の語をして曉る可き曉る可からざるの間に在らしむる者有らんや。經學家の實事求是の法を以て子を讀めば、其の益限り無し。大抵天地の間、人情物理より、下、猥瑣纖末の事に至るまで、經史の盡す能はざる所の者は、子部に之れ有らざる無し。其の趣妙の處、之を經史に較ぶれば、尤も人を引きて勝に入り易し。故に子を讀まざれば、瓦礫糠粃も、至道に非ざる無きを知らず。子を讀まざれば、文章の面目、變化百出し、端倪す可き莫きを知らざるなり。今人は古文を學びて以て古文を爲る。唐宋の巨公は、諸子を學びて以て古文を爲る。此れ古文学家の秘奧なり。此れ其の、人に益あるや、又經史を表裏とするの外に在る者有り。

【註】

○この一段には『經解入門』經與子相表裏第二十からの引用がある。

周秦諸子。皆與經相出入。如管子之治術、司馬之兵法、墨子之引書、荀子之傳詩、皆得經之古義。而讀者取其事實、可以補證經傳之簡略。知其旨歸、可以補證經傳之謬文佚文。知其古訓古音、可以訂經傳音注之得失。即漢魏諸子亦然。蓋漢魏去古未遠、微言大義、猶未絕于人間。故其義理雖純雜不一、而所以發明經義、仍瑕不掩瑜、與唐以後所謂子部者大別。惟讀之宜以細心、務在先求訓詁、必使確實可解。勿徒空論其文、臆度其理。即如莊子寓言、多烏有子虛之事。而其文字名物、仍鑿鑿可據。蓋凡古人著書斷未有。故令其語在可解不可解之間者。況天地間、人情物理、猥瑣纖末之事、經史所不能盡者、子部無平不有。其趣妙處、較之經史、尤易引人入勝。以經學家實事求是之法讀之、斯其益無限。因取先秦以上傳記、子史及解經之書、古人通名傳記、眞出古人之手、及漢魏著述中理者、約舉其名于後。俾學者知所趨焉。

【通釈】

諸子を読むには訓詁を追求し、古注をみなければならぬ。

諸子は道術が異なり、体裁もそれぞれ別である。しかし読み方にはやはり方法がある。第一に、訓詁を追求し、できるだけ正確に理解しなければならぬ。決して文章を空論して義理を臆測してはならない。俗本の『莊子因』『楚辭集』『管子評注』などは、もっとも事を傷つける。たとえば『莊子』の寓言は、架空の話が多いだけであつて、文字や名物に関しては、はつきりと理解でき、文章はわかりやすい。どうして書著わして後世に伝えようとしていながら、故意にわかるかわからないかのような書き方をする人があろうか。經学家の实事求是の方法で諸子を読めば、限りなく有益である。大抵天地の間、人情物理から、些細微小な事にいたるまで、經書や史書では述べつくせないことでも、子部の書に載っていないものはない。その妙趣の箇所は經書や史書にくらべて、とりわけ人に興味をもたせやすい。だから諸子を読まなければ、瓦礫や糠粃（ぬか・しいな）のような微細なことでも、至極でないものはないということがわからない。諸子を読まなければ、文章の面目は、変化が百出し、測り知れないということがわからない。今の人は古文を學んで古文を作る。唐宋の大家は諸子を學んで古文を作る。これが古文家の秘訣である。表裏一体である經書と史書以外にも、人に対して有益なものが諸子にはあるのである。

【書目答問】

・莊子郭象注附釋文十卷。明鄒之嶧刻本、明胡氏世德堂大字本、十子本即世 德堂本。

— 3 —

諸子宜買叢書

諸子切要者、國朝人多有校刻善本。多在叢書中。其未及者、明人亦多有仿宋重刻單

行本。但枝節求之、即五都之市、亦須積年累月、始能完備。將何日讀之耶。爲學者計、止有多買叢書一法。購得一書、即具數種或數十種。其單行精本、徐圖可也。明刻叢書、極爲荒率。脫誤固然、其專輒刪改、最爲大害。然不聞陶淵明語云慰情聊勝無耶。

明刻若漢魏叢書、凡四刻。後出愈多、刻不精。然易得。爲子部大轄。津逮秘書、古傳記甚多。力能購者、不可不蓄。其餘有四子、六子、十一子、二十子之屬。皆坊間所有。此外甚繁雜、衆刻書目備載之。今皆微矣。品彙、說部、圖本不好。近時刻本、有十子全書。此書名甚陋、而實見價廉。中有善本、且見舊注。惟批語不雅。荀勗校、淮南莊校、莊子附錄文、皆好。通行易得。至國朝人叢書、率皆精好。二孫星衍、馮翼、二盧見曾、文弼、孔繼涵、畢沅、黃丕烈、錢熙祚諸家尤勝。衆珍版書、亦叢書類。間有古子。惟其書體例不一。不專子部、或止一兩種。歐氏遺書、邵氏遺書、孔氏所著書、竟是一人所著。而中有注解古傳記。然其中有精校本、精注本、足本、孤本。學者過市遇叢書、可檢其目。多古籍者、萬不可忽。坊行秘書廿八種、粗惡誤人。不可看。國朝刻、海學津討源、多六朝至宋史部子部書。但無古子。

【書き下し】

子を読むには宜しく叢書を買ふべし。

諸子の切要なる者は、國朝人多く校刻善本有り。多く叢書中に在り。其の未だ及ばざる者は、明人に亦多く仿宋重刻單行本有り。但だ枝節之を求むれば、即ひ五都の市も、亦須く年を積み月を累めべくして、始めて能く完備す。何れの日を將て之を読むか。學ぶ者の爲に計れば、止だ多く叢書を買ふの一法有るのみ。一書を購得すれば、即ち數種或いは數十種を具ふ。其の單行の精本は、徐ろに圖りて可なり。明刻の叢書は極めて荒率と爲す。脱誤固より然り、其の専ら輒ち刪改するは、最も大害と爲す。然れども陶淵明の語に「情を慰むるは聊か無きに勝る」と云ふを聞かざるか。

明刻、『漢魏叢書』の若きは、凡そ四刻。後出愈いよ多きも、刻精ならず。然れども得易し。

子部の大帙と爲す。『津逮秘書』は古傳記甚だ多し。力めて能く購ふ者は、蓄へざる可からず。其の餘には『四子』『六子』『十一子』『二十子』の屬有り。皆坊間にある所なり。此の外は甚だ繁雜なり。『纂刻書目』備に之を載す。今皆微なり。『品彙』『說郭』兩本は好からず。近時の刻本に『十子全書』有り。此の書、名甚だ陋なるも、習見して價廉し。中に善本有り、且つ皆舊注なり。惟だ批語雅ならず。荀附校、淮南莊校、莊子附釋文は、皆好し。通行して得易し。國朝人の叢書に至りては、率皆精好。二孫星衍、馮翼、二盧見曾、文翔、孔繼涵、畢沅、黃丕烈、錢熙祚の諸家尤も勝る。『聚珍版書』も亦叢書の類なり。間ま古子有り。惟だ其の書、體例一ならず。子部を専らにせず、或いは一兩種に止まる。『藏氏遺書』『鄒氏遺書』『孔氏所著書』は、竟に是れ一人の著はす所にして、中に注解古傳記有り。然れども其の中に精校本、精注本、足本、孤本有り。學ぶ者市を過ぎて叢書に遇へば、其の目を檢す可し。古籍多き者は、萬忽せにす可からず。坊間の秘書廿八種は、粗懸にして人を誤らす。看る可からず。國朝刻の『釋海』『學津討源』は、六朝より宋に至る史部・子部の書多し。但だ古子無し。

【註】

○陶淵明の語に「情を慰むるは聊か無きに勝る」陶淵明の「和劉柴桑」詩に、「茅茨已就治、新囀復應禽、谷風轉淒薄、春醪解飢飢。弱女雖非男、慰情聊勝無」(茅茨、已に治に就き、新囀復た應に禽すべし。谷風、轉た淒薄なるも、春醪、飢えと勉れとを解く。弱女は男に非ずと雖も、情を慰むるは聊か無きに勝る)とある。

○この一段には『經解入門』平日讀經課程第五十一からの引用がある。

一宜購叢書。叢書所收古今各部、無慮數十百種、中間必多極要者。分購單行本、積數處不得其全。購叢書、則一舉可以不遺。且積算其價、又倍廉于單行之本。則購一書、而其中之雜者、正可不費錢論、涉獵一過、亦是好處。惟要知刻本善否。明刻叢書、類多荒率。國朝人刻本、率皆精好、一孫、二盧、孔、畢諸家之本尤勝。其書體例不一。中有精校本、精注足本。過市遇叢書、可檢其目。多古籍者、萬不可忽。

【通釈】

諸子を読むには叢書を買わなければならない。

諸子の重要なものには、清朝の人が校刻した善本がたくさんある。叢書に入っていることが多い。清朝の人が校刻していないものには、明の人が宋版を重刻した単行本がたくさんある。ただあれもこれもすべて手に入れようとするならば、たとえ五つの街の市場を探しまわったとしても、長い年月をかねないと完備することはできない。(そうすると) いったいいつそれを読むのか。学ぶ者のために考えると、叢書をたくさん購入するという方法しかない。ひとつの叢書を購入すれば、すぐに数種類あるいは数十種類(の書)を具えることができる。単行の精本は、あとでゆくり備えればよい。明刻の叢書はきわめて粗雑である。脱誤はもちろんのこと、勝手に刪改しているのがもっとも大きな弊害である。しかし陶淵明の語に「情を慰むるは聊か無きに勝る」(情をなぐさめられるので、ないよりましである) というのを聞いたことはないか。

明刻の叢書では、『漢魏叢書』あわせて四度刻された。後で刻されたものほど内容が多いが、刻は精巧ではない。しかし手に入りやすい。が子部の書をたくさん集めたものである。『津逮秘書』は古い傳記がたくさん収録されている。購入できる余裕のある人は買っておいたほうがよい。これ以外に『四子』『六子』『十一子』『二十子』などがあるが、いづれも世間に流布している。このほか(の叢書) ははなはだ雑多である。『纂刻書目』にくわしく載っている。今ではすべて衰退している。『品彙』『說郭』は、兩本はよくない。最近の刻本に『十子全書』がある。この書は名はとて卑俗であるが、よく見かけ、値段も安い。善本が含まれており、なおかつすべて旧注である。ただ批評の語は上品ではない。附校の『荀子』、莊校の『淮南子』、附釋音『莊子』はいづれもよい。通行していて手に入れやすい。清朝の人の叢書については、おおむね精好である。二孫星衍、馮翼、二盧見曾、文翔、孔繼涵、畢沅、黃丕烈、錢熙祚の諸家はとりわけすぐれている。『聚珍版書』も叢書の一種である。まま古い諸子を含んでいる。ただこれらの叢書は体例が同じではない。子部の書だけ

を収めているわけではなかったり、一種類か二種類しかなかったりする。『戴氏遺書』『郝氏遺書』『孔軒所著書』は、ひとりの人が著わした書を集めたものであり、古い傳記の注解も含まれている。しかしその中に精校本、精注本、足本、孤本が含まれている。学ぶ者は市場で叢書をみかけたら、目次を調べてみて、古籍をたくさん収録している叢書は決して怪視してはならない。世間に行っている叢書廿八種は、粗悪で人を誤らせる。見てはならない。清朝刻の『稗海』『學津討源』は、六朝から宋までの史部や子部の書がたくさん収められている。ただ古い子書はない。

【書目答問】

- ・漢魏叢書。明程榮刻三十八種、何允中刻七十六種。國朝王謨刻八十六種、又廣爲九十四種、編校不善。
- ・津逮秘書。明毛晉。
- ・中都四子。周泰十一子、吳刻二十子、崇德堂二十子。以上明刻、多古書。
- ・世德堂六子。明胡氏本。百三家集見前。
- ・坊行篆刻書目、續書目、亦可備覽、但未詳核、亦多蕪雜、活字本尤劣。
- ・說郛。明刻、多古書。
- ・十子全書。國朝刻、間有古書。
- ・荀子楊倞注二十卷。謝塘校本。通行蘇州王氏刻十子全書本、即謝校本。僞。
- ・淮南子高誘注二十一卷。莊達吉校本。十子本即此本。兼道家。
- ・莊子郭象注附釋文十卷。明鄒之嶧刻本、明胡氏世德堂大字本、十子本即世德堂本。
- ・道。
- ・平津館叢書。孫星衍。
- ・岱南閣叢書。孫星衍。
- ・問經堂叢書。孫馮翼。
- ・雅雨堂叢書。盧見曾。
- ・抱經堂叢書。盧文弨。

- ・微波榭遺書。孔繼涵。
- ・經訓堂叢書。畢沅。
- ・士禮居叢書。黃丕烈。
- ・珠叢別錄。錢熙祚。
- ・指海。錢熙祚。止刻十二集。
- ・武英殿聚珍版書。通行者一百三十八種、續出者尚多。福州重刻、杭州重刻三十九種。
- ・戴氏遺書。戴震。未盡。
- ・郝氏遺書。郝懿行。未盡。
- ・舉軒所著書六十卷。孔廣森。七種。
- ・稗海。明刻、多古書。
- ・學津討源。張海鵬。校未精。

一、讀古人文集。(古人の文集を読む)

— 1 —

讀古集宜知體要。能知體要、則讀文集、有裨於經史。

凡集中有奏議考辯、記傳文字中有實事者、須詳覽之。往來書牘中有實事者、刻書序詳載後者同。其餘鑿空立論、流連風景之作、不必措意。

【書き下し】

古集を讀むには宜しく體要を知るべし。能く體要を知らば、則ち文集を讀むも、經史に益有り。

凡そ集中に奏議・考辯有り。記傳の文字中に實事有る者は、須く詳らかに之を覽

るべし。往來書牘中に實事有る者、刻書序に詳らかに縁起を載する者、同じ。其の餘の鑿空立論、流連風景の作は、必ずしも意を措かず。

【通釈】

古人の文集を読むにはその書の体例を知らなければならない。体例を知ることができれば、文集を読んでも經子史に有益である。

そもそも文集中には奏議や考証がある。記伝の文章の中に具体的な事実が載っている場合は詳細に閲覽しなければならない。具体的な事実が載っている往來書牘、詳細に縁起を載せる刻書序も同じ。その他の根拠のない空論、遊興や風景を詠んだ作品は、意にとめる必要はない。

— 2 —

讀國朝人文集、有實用勝於古集。

方苞、全祖望、杭世駿、袁枚、彭紹升、李兆洛、包世臣、曾國藩集中、多碑傳志狀。可考當代掌故、前哲事實。朱彝尊、盧文弨、戴震、錢大昕、孫星衍、顧廣圻、阮元、錢泰吉集中、多刻書序跋。可考學術流別、羣籍義例。朱彝尊、錢大昕、翁方綱、孫星衍、武億、嚴可均、張澍、洪頤煊集中、多金石跋文。可考古刻源流、史傳差誤。此類甚多、可以隅反。後兩體、國朝人開之。古集所無。

【書き下し】

國朝人の文集を読むは、實用、古集に勝ること有り。

方苞、全祖望、杭世駿、袁枚、彭紹升、李兆洛、包世臣、曾國藩の集中には、碑傳志狀多し。當代の掌故、前哲の事實を考す可し。朱彝尊、盧文弨、戴震、錢大昕、孫星衍、顧廣圻、阮元、錢泰吉の集中には、刻書序跋多し。學術の流別、羣籍の義例を考す可し。朱彝尊、錢大昕、翁方綱、孫星衍、武億、嚴可均、張澍、

洪頤煊の集中には、金石の跋文多し。古刻の源流、史傳の差誤を考す可し。此の類甚だ多し、以て隅反す可し。後の兩體は、國朝人之を開けり。古集に無き所なり。

【通釈】

清朝の人の文集を読むのは、實用という点で古人の文集に勝る場合がある。

方苞、全祖望、杭世駿、袁枚、彭紹升、李兆洛、包世臣、曾國藩の文集には、碑傳志狀がたくさん収録されている。當代の掌故、前哲の事實を考察することができる。朱彝尊、盧文弨、戴震、錢大昕、孫星衍、顧廣圻、阮元、錢泰吉の文集には、刻書序跋がたくさん収録されている。學術の流別、羣籍の義例を考察することができる。朱彝尊、錢大昕、翁方綱、孫星衍、武億、嚴可均、張澍、洪頤煊の文集には、金石の跋文がたくさん収録されている。古刻の源流、史傳の誤りを考察することができる。このような類はとも多い、類推しなさい。あとの二体は、清朝の人がはじめた文体であり、古い文集にはないものである。

【書目答問】

- ・望溪文集十八卷、集外文十卷、補遺二卷、年譜二卷、方苞。 戴鈞衡補編。
- ・鮚埼亭集三十八卷、經史問答十卷、外集五十卷、全祖望。 正集史夢蛟刻、問答萬氏刻、外集、別集別一人刻、詩集鄭氏刻。
- ・道古堂文集四十八卷、詩集二十六卷、杭世駿。
- ・小倉山房外集八卷、袁枚。 別行。
- ・二林居集二十四卷、測海集六卷、彭紹升。
- ・幾一齋文集二十六卷、李兆洛。 活字版本。
- ・安吳四種。中衛一勺七卷、藝舟雙楫九卷、管情三義八卷、齊民四術十二卷、包世臣。 道光丙午活字版本、武昌局本。
- ・曾文正公集四卷。曾國藩。 青浦初刻本、又直隸再刻本非全集。 又長沙新刻本、合刻詩集四卷。

・曝書亭集八十卷、附錄一卷、朱彝尊。
・曝書亭集外稿八卷、馮登府輯。

・抱經堂文集三十四卷、盧文弨、抱經堂叢書。

・東原集十卷、戴震、戴氏遺書內、亦附經韻樓叢書。

・潛研堂文集五十卷、詩集二十卷、錢大昕。

・問字堂集五卷、岱南閣集五卷、五松園文集一卷、孫星衍。

・思適齋集十八卷、顧廣圻、徐渭仁刻春暉堂叢書中。

・望經室集六十卷、阮元、一集十四卷、二集八卷、三集五卷、四集二卷、詩集十二卷、外集五卷、續集十一卷、再續集六卷。

・甘泉鄉人稿二十四卷、錢泰吉。

・復初齋集、卷、翁方綱。

・授堂集、卷、武億。

・鐵橋漫稿八卷、嚴可均、全稿未刻。

・養素堂文集三十五卷、張澍。

・傳經堂叢書、洪頤煊、洪震煊、未盡。

— 3 —

詞章家宜讀專集。

古人名別集、俗稱專集。須取全集觀之、方能得其面目。一集數十百卷、不能皆精美。然必見其疵病處、方知其獨到處也。中材下學、古集豈可勝讀。止擇最有名諸大家瀏覽之、取性所嗜者三兩家熟玩之可矣。唐以前專集有數、明張溥纂輯漢魏六朝百三家集、如力能購之、亦省尋求。

詩之名家、最烜赫者、六朝之陸陶謝鮑庾、唐之李杜韓白、宋之蘇黃陸、金之元好問、明之高啓、李夢陽、國初之吳偉業。又如唐之四傑、王孟韋柳、高岑錢劉、孟郊、張籍、李商隱、杜牧、宋之歐梅王安石范、元之虞楊吳、明之何景明、王世貞、

李攀龍、徐禎卿、楊慎、國初之施閏章、王士禎、朱彝尊、查慎行、亦甚表表。詩家太多、此約言之。

古文、除世稱八家外、唐之元結、陸贄、雖多排偶、不得限以四六之名。劉禹錫、孫樵、李翱、宋之宋祁、張耒、葉適、元之姚燧、明之王守仁、歸有光、國朝之方苞、姚鼐、惲敏、包世臣、曾國藩諸家、皆宜一覽。此專論散文、故畧舉數家、餘詳前條。

詩文一道、各有面目、各有意境。大家者、氣體較大、所造較深、所能較多耳。若謂大家兼有古今之長、此目未見衆集之謬說也。雖杜與韓、豈能盡詩文之能事哉。

【書き下し】

詞章家は宜しく專集を讀むべし。

古人、別集を名づけて、俗に專集と稱す。須く全集を取りて之を觀るべくして、方めて能く其の面目を得。一集數十百卷、皆に精美なる能はず。然れども必ず其の疵病の處を見て、方めて其の獨到處を知るなり。中材下學は、古集豈に讀むに勝ふ可けんや。止だ最も有名諸大家を擇んで之を瀏覽し、性嗜む所の者三兩家を取りて之を熟玩して可なり。唐以前の專集は數有り。明の張溥『漢魏六朝百三家集』を纂輯す。如し力めて能く之を購へば、亦尋求を省く。

詩の名家、最も烜赫なる者は、六朝の陸・陶・謝・鮑・庾、唐の李・杜・韓・白、宋の蘇・黃・陸、金の元好問、明の高啓、李夢陽、國初の吳偉業。又唐の四傑、王・孟・韋・柳、高・岑・錢・劉、孟郊、張籍、李商隱、杜牧、宋の歐・梅・王安石・范、元の虞・楊・吳、明の何景明、王世貞、李攀龍、徐禎卿、楊慎、國初の施閏章、王士禎、朱彝尊、查慎行の如きも、亦甚だ表表たり。詩家太多し、此は之を約言す。

古文は、世に稱する八家を除きて外、唐の元結、陸贄排偶多しと雖も、限るに四六の名を以てするを得ず。劉禹錫、孫樵、李翱、宋の宋祁、張耒、葉適、元の姚燧、明の王守仁、歸有光、國朝の方苞、姚鼐、惲敏、包世臣、曾國藩の諸家は、皆宜しく一覽すべし。此れ専ら散文を論ず。故に數家を畧す。餘は前條に詳らかなり。

詩文は一道、各おの面目有り、各おの意境有り。大家なる者は、氣體較や大、造る所較や深く、能くする所較や多きのみ。大家は古今の長を兼有すと謂ふが若きは、此れ目未だ衆集を見ざるの謬説なり。杜と韓と雖も、豈に能く詩文の能事を盡さんや。

【通釈】

文章家は專集を読まなければならない。

古人は別集を俗に專集という。全集を読むことによつて、はじめて作者の眞価を理解することができる。しかしひとつの全集は数十巻数百巻あり、すべてがすぐれているわけではない。しかしかならずその欠点を見ることによつて、はじめてその獨創性がわかる。並の才能のものは（大部な）古人の文集を読むにたえられようか。もつとも有名な大家をえらんで目を通し、性にあう作家、三人を熟読玩味すればよい。唐以前の專集は数が多くない。明の張溥が編輯した『漢魏六朝百三名家集』を購入できれば、やはりひとつひとつ探す手間が省ける。

もつとも輝かしい詩の名家は、六朝の陸雲、陶淵明、謝朓、鮑照、庾信、唐の李白、杜甫、韓愈、白居易、宋の蘇軾、黃庭堅、陸游、金の元好問、明の高啓、李夢陽、清初の吳偉業である。さらに唐の四傑（王勃、楊炯、盧照鄰、駱賓王）、王維、孟浩然、韋應物、柳宗元、高適、岑參、錢起、劉長卿、孟郊、張籍、李商隱、杜牧、宋の歐陽脩、梅堯臣、王安石、范成大、元の虞集、楊維禎、吳萊、明の何景明、王世貞、李攀龍、徐禎卿、楊慎、清初の施閏章、王士禎、朱彝尊、查慎行なども、やはりすぐれている。詩人は多い、ここではおまかにいったにすぎない。

古文については、世間で称される唐宋八家（韓愈、柳宗元、歐陽脩、蘇洵、蘇軾、蘇轍、曾鞏、王安石）以外に、唐の元結、陸贄排偶の作が多いが、四六文の作家と限定してはならない。劉禹錫、孫樵、李翱、宋の宋祁、張耒、葉適、元の姚燧、明の王守仁、歸有光、清朝の方苞、姚鼐、惲敏、包世臣、曾國藩の諸家はひととおり目を通さなければならない。これは主として散文について論じている。だから何人かの作家をあげ

た。それ以外は前條にくわしい。

詩と文章は、表現手段は同じであるが、それぞれ面目があり、それぞれ意境がある。大家といわれるものは、氣宇が（常人にくらべて）広大であり、造詣が（常人にくらべて）深く、得意なものが（常人にくらべて）多いにすぎない。大家は古今の長所を兼ね備えているというのは、たくさんの方集をみていないことによるあやまった説である。杜甫や韓愈であっても、詩文のあらゆる事柄をつくしているといえようか。

【書目答問】

- ・漢魏六朝百三名家集一百二十八卷。明張溥編。重刻本。明汪士賢刻漢魏六朝二十名家集。在張前。
- ・陸士龍集十卷。晉陸雲。二十名家集本。
- ・陶淵明文集十卷。晉陶潛。汲古閣仿宋大字本、何氏成都刻翻毛本。
- ・謝宣城集五卷。齊謝朓。拜經樓校本。
- ・鮑參軍集十卷。宋鮑照。明朱應登刻本。
- ・庾子山集注十六卷。周庾信。倪璠注。通行本。
- ・李太白集三十卷。唐李白。繆曰芑仿宋臨川本。
- ・李太白集注三十六卷。王琦注。通行本。
- ・杜詩詳注二十五卷。附編二卷。唐杜甫。仇兆鼐注。通行本。
- ・杜詩鏡銓二十卷。楊倫注。杜文注解二卷。張潛注。成都合刻本。杜詩注本太多、仇楊爲勝。
- ・重刻東雅堂韓昌黎集四十卷。外集十卷。附點勘。唐韓愈。宋廖瑩中輯注。蘇州翻刻本。陳景雲點勘。明徐氏東雅堂原刻本、今尚有。
- ・韓文考異十卷。宋方崧卿舉正、朱子校定。李光地刻本。宋王伯大編韓文考異正集、外集、遺文共五十一卷。明刻本、非朱子原書。
- ・昌黎詩箋注十一卷。顧嗣立補注。秀楚草堂原刻本、吳廷樞重刻本。

- 昌黎詩增注證誤十一卷。黃鉞。家刻本。
- 朱墨本昌黎詩注十一卷。怡刻本。
- 編年昌黎詩注十二卷。方世舉。雅雨堂本。
- 韓集點勘四卷。陳景雲。文道十書本。重刊五百家注韓集四十卷。乾隆甲辰富氏仿宋本。雖選東雅堂本、雕印尚好。
- 白氏長慶集七十一卷。唐白居易。明元白合刻通行本。
- 白香山詩集四十卷。附錄年譜一卷。汪立名編校。一隅草堂刻本。
- 東坡七集一百一十卷。宋蘇軾。集四十卷、後集二十卷、奏議十五卷、內制集十卷、外制附樂語三卷、應詔集十卷、續集十二卷。明成化四年江西布政司重刻宋本、嘉靖十三年江西布政司又重刻。此本為最古。又大全集本一百三十卷、分體編次、易於檢尋、明刻今刻多有。
- 蘇詩合注五十卷。附錄五卷。馮應榴注。自刻本。蘇詩、宋施元之注最有名、查慎行補注亦善。馮、王、翁三注更詳備。
- 蘇詩編注集成總案四十五卷。詩四十六卷、雜綴一卷。王文誥注。自刻本。馮詳事實、王兼論詩。
- 蘇詩補注八卷。翁方綱注。蘇齋叢書本、粵雅堂本。
- 山谷內集三十卷、外集十四卷、別集二十卷、詞一卷、簡尺二卷、年譜三卷。宋黃庭堅。聚珍本、福本。
- 山谷內集注二十卷。宋任淵。外集注七卷。宋史容。別集注二卷。外集補四卷。年譜十四卷。宋史季溫。翁方綱校刻本。聚珍本無末二種。
- 渭南文集五十卷。逸稿二卷。劔南詩稿八十五卷。陸游。汲古閣本。
- 遺山集四十卷。附錄一卷。金元好問。張穆校補刻本。又康熙間無錫華氏刻本。
- 元遺山詩注十六卷。施國祁注。原刻本。
- 青邱詩集注十八卷。附錄彙集五卷。明高啓。金檀注。雍正六年刻本。
- 空同集十六卷。明李夢陽。明刻本。今多詩集單行。
- 梅村集四十卷。吳偉業。欲詳知國朝詩家者、具鄭方坤國朝詩鈔小傳、王昶湖海詩傳、張維屏詩人徵略中。
- 初唐四傑集。唐王勃、楊炯、盧照鄰、駱賓王。通行本。王子安集十六卷。盈川集十卷。盧昇之集七卷。附錄一卷。駱丞集四卷。
- 駱丞集四卷。顧廣圻校。秦恩復刻本。合李元寶、呂衡州為三唐人集。
- 駱賓王集十卷。顧之遠小讀書堆校刻足本。
- 駱臨海集注十卷。陳熙晉注。原刻本。
- 王右丞集注二十八卷。唐王維。趙殿成注。乾隆二年刻本。
- 孟襄陽集三卷。唐孟浩然。汲古閣本、明閔齊伋刻本、又明刻本四卷。
- 韋蘇州集十卷。唐韋應物。項綱翻刻宋本、席啓寓編刻唐百家詩本、汲古閣本後有拾遺一卷。
- 柳集四十五卷。龍城錄二卷。外集二卷。附錄二卷。集傳一卷。唐柳宗元。明嘉靖郭雲鵬重刻宋本、天啓壬戌柳氏再刻本。廷桂永州新刻本、附年譜。無龍城錄。陳景雲柳集點勘四卷。未刊。
- 柳河東集輯注四十五卷。外集五卷。附錄揚子注龍城錄一卷。明蔣之翹輯。楊廷理刻本。此本通行。宋人柳文音辯五百家注、已括此書內。
- 高常侍集八卷。高適。四部叢刊影印明活字本、又畿輔叢書本。【補正】
- 岑嘉州詩四卷。岑參。四部叢刊影印明正德刻黑口本。【補正】
- 錢考功集十卷。唐錢起。席氏本。
- 劉隨州集十卷。補遺一卷。唐劉長卿。席氏本。
- 孟東野集十卷。唐孟郊。席氏本。汲古閣本、明閔刻本。
- 張司業集八卷。拾遺一卷。附錄一卷。唐張籍。席氏唐百家詩本、明萬曆張尚儒刻本八卷。
- 玉谿生詩詳注三卷。唐李商隱。馮浩注。原刻本。勝於朱鶴齡、姚培謙注本。
- 樊南文集詳注八卷。唐李商隱。勝於徐樹穀、徐炯箋注本。
- 樊南文集補編十二卷。今人。渭河刻本。
- 樊川文集注二十卷。外集一卷。別集一卷。唐杜牧。馮集梧注。原刻本。

- ・文忠集一百五十三卷、附錄五卷。宋歐陽脩。歐陽衡編刻本。
- ・宛陵集六十卷、附錄五卷。宋梅堯臣。震澤徐氏刻本、又梁中孚刻本。
- ・臨川集一百卷。宋王安石。明嘉靖三十九年何氏翻宋本、萬曆再刻本。
- ・王荊公詩注五十卷。宋李璧。張宗松清綺齋校刻本。
- ・石湖詩集三十四卷。宋范成大。秀林草堂刻本。南宋四家、蕭千巖詩集已佚尤表止存梁溪遺稿一卷、尤侗輯本。
- ・道園學古錄五十卷。元虞集。通行本。仁壽新刻本六十卷、仍少文遺稿八卷。
- ・鐵崖古樂府注十六卷。元楊維禎。卜瀨注。乾隆甲午刻本、西安王氏刻本四卷無注。
- ・淵穎集十二卷、附錄一卷。元吳萊。國朝人校刻本、明嘉靖卓氏刻本。
- ・大復集三十八卷。明何景明。河南重刻本。
- ・弇州山人四部稿一百七十四卷、續稿二百七卷。明王世貞。明刻本。胡應麟少室山人類稿、今罕見。
- ・滄溟集三十卷、附錄一卷。明李攀龍。明刻本。
- ・徐禎卿迪功集、皆明詩家最著者、有刻本、不常見、並收盛明百家詩內。
- ・升菴全集八十一卷、外集一百卷、遺集一卷。明楊慎。通行本不盡。
- ・學餘堂文集二十八卷、詩集五十卷、外集二卷。施閏章。
- ・帶經堂集九十二卷。王士禎。合他著述統名漁洋山人著述三十八種。
- ・曝書亭集八十卷、附錄一卷。朱彝尊。
- ・曝書亭集外稿八卷。馮登府輯。
- ・敬業堂集五十卷。查慎行。
- ・蘇老泉先生集二十卷、附錄二卷。宋蘇洵。邵仁泓刻本。原名嘉祐集。
- ・變城集五十卷、後集二十四卷、第三集十卷、應詔集十二卷。宋蘇轍。明刻本。
- ・元豐類稿五十卷。宋曾鞏。顧松齡刻本。
- ・元次山集十二卷。唐元結。刻本。明湛若水校本十卷。
- ・陸宣公奏議二十二卷。唐陸贄。通行本。舊題翰苑集、實非翰苑集元書、從衆

題奏議。

- ・劉賓客文集三十卷、外集十卷。唐劉禹錫。正集通行本、外集傳鈔本。
- ・孫可之集十卷。唐孫樵。汲古閣本。
- ・李文公集十八卷。唐李翱。汲古閣本。
- ・宋景文集六十二卷、補遺二卷、附錄一卷。宋宋祁。聚珍本、福本。
- ・柯山集五十卷。宋張耒。聚珍本、福本。
- ・水心集二十九卷。宋葉適。通行本。
- ・水心別集十六卷。同上。温州新刻本、武昌局本。
- ・牧菴文集三十六卷。元姚燧。聚珍本、福本。明劉昌編中州名賢文表三十卷、宋肇刻本、內有姚燧文八卷。
- ・王文成全書三十八卷。明王守仁。明刻本、又通行本亦稱陽明全集。
- ・震川文集三十卷、別集十卷。明歸有光。歸氏家刻本。
- ・望溪文集十八卷、集外文十卷、補遺二卷、年譜二卷。方苞。戴鈞衡補編。
- ・惜抱軒文集十六卷、後集十卷、詩十卷。姚鼐。
- ・大雲山房初集八卷、言事二卷、二集四卷。惲敬。
- ・安吳四種。中衢一勾七卷、藝舟雙楫九卷、管仲三義八卷、齊民四術十二卷。包世臣。道光丙午活字版本、武昌局本。
- ・曾文正公文集四卷。曾國藩。青浦初刻本、又直隸再刻本非全集。

4

讀昭明文選宜看注。

李善注最精博、所引多古書。不獨多記典故、於考訂經史小學、皆可取資。不知選注之用者、不得爲選學。胡刻稍。葉刻亦好。五臣注不善。

【書き下し】

昭明の『文選』を読むには宜しく注を見るべし。

李善注最も精博、引く所古書多し。獨り多く典故を記するのみならず、經史小學を考訂するに於て、皆資を取る可し。『選注』の用を知らざる者は、選學を爲すを得ず。胡刻精なり。葉刻も亦好し。五臣注は善ならず。

【通釈】

昭明太子の『文選』を読むには注をみなければならぬ。

李善注はもともと精密博大で、古書の引用が多い。典故をたくさん記載するだけではなく、經書・史書・小學の考訂に対しても、資料を提供してくれる。『文選注』の効用を知らないものは、文選學を行うことはできない。胡刻は精巧である。葉刻もよい。五臣注はよくない。

【書目答問】

・文選李善注六十卷、附考異十卷、胡克家仿宋本、武昌局翻本、廣州翻本。葉氏海錄軒評注本六十卷、亦佳、汲古閣本較可。
・文選六臣注六十卷、唐呂延濟、劉良、張銑、呂向、李周翰、李善。明新都崔氏大字本。不如李善單注、已有定論、存以備考。

— 5 —

學選體、當學其體裁筆調句法。不可徒寫難字。

試看選中詩文、前人評論激賞、多在空靈波瀾處。至其體陳物類、佶屈聲牙、未聞稱道之者。可悟。

選學有徵實課虛兩義。考典實、求訓詁、校古書、此爲學計。摹高格、獵奇采、此爲文計。生典奇句可用。僻字不可用。

【書き下し】

選體を學ぶには、當に其の體裁・筆調・句法を學ぶべし。徒らに難字を寫す可からず。

試みに選中の詩文を見るに、前人の評論激賞するは、多く空靈波瀾の處に在り。其の物類を體陳し、佶屈聲牙に至りては、未だ之を稱道する者を聞かず。悟る可し。

選學には徵實・課虛の兩義有り。典實を考し、訓詁を求め、古書を校す、此れを學計と爲す。高格を摹し、奇采を獵す、此れを文計と爲す。生典奇句は用ふ可し。僻字は用ふ可からず。

【通釈】

文選體を學ぶには、その體裁・筆調・句法を學ばなければならない。ただ難解な文字をまねるだけではいけない。

こころみに文選の詩文をみると、前人が評論激賞するところは、ほとんど空靈波瀾のところである。物の名前を羅列したところ、むづかしくて読みにくいところに関して、これまで賞賛するのを聞いたことがない。理由はいわなくてもわかるであらう。

文選學には徵實・課虛のふたつの意味がある。故実を考察し、訓詁を追求し、古書を校訂する、これが學計である。高い品格を摹仿し、珍しい色彩を求める、これが文計である。あまりみかけない典故や奇句は用いてもよいが、めったに使わない字は用いてはならない。

— 6 —

淺學讀文選亦宜看全本。

即擇尤而讀、亦宜觀其原書。若坊刻文選集腋、譌脫瑣碎、首尾不具、掇拾入文、

無益有害。文選詞句、宜於五經文詩古駢體、於八股不盡相宜。時文用文選詞藻、止可相題適用、或一半句、或三數字、或段落文、其詞此間生童試卷、喜填文選泛語、動輒數十句、並不切合、此於文體既乖、亦於試場有礙。

【書き下し】

淺學、『文選』を読むには亦宜しく全本を見るべし。

即ひ尤を擇んで讀むも、亦宜しく其の原書を觀るべし。坊刻の『文選集腋』の若きは、譌脱瓌碎にして、首尾具はらず、掇拾入文、益無く害有り。『文選』の詞句は、五經の文・詩古駢體に宜しきも、八股に於ては盡くは相宜しからず。時文に『文選』の詞藻を用ふるには、止だ題を相て適用し、或いは一半句、或いは三數字、或いは段落文、其の調を裁す可し。此の間、生童の試卷、喜んで『文選』の泛語を填し、動もすれば輒ち數十句、並びに切合せず。此れ文體に於て既に乖り、亦試場に於て礙ぐる有り。

【通釈】

初学者が『文選』を読むにはやはり全本をみなければならぬ。

たとえすぐれたものを選んで読む場合でも、やはり原書をみなければならぬ。坊刻の『文選集腋』は、ばらばらで誤りだらけで、首尾がそなわっておらず、切り貼りして文章に入れ込み、害ばかりで益はない。『文選』の詞句は、五經の文や詩の古体駢体に用いるのに適しているが、八股文に用いるにはすべてが適しているわけではない。時文に『文選』の詞藻を用いるには、ただ題をみて、一句半句、あるいは二三字、あるいは一段落の文を摘録し、その調子をまねるとよい。この地における生童は喜んで答案用紙を『文選』の空談でうめ、ややもすれば数十句も引用しており、まったくびつたりしない。これは文体に対してもとるだけでなく、試験場においても不利になることがある。

【書目答問】

・文選李善注六十卷、附考異十卷。胡克家仿宋本、武昌局翻本、廣州翻本。葉氏海

録軒評注本六十卷、亦佳、汲古閣本較可。

・文選六臣注六十卷。唐呂延濟、劉良、張銑、呂向、李周翰、李善。明新都崔氏大字本。不如李善單注、已有定論、存以備考。

— 7 —

讀後世詩文選本宜擇善者。

選本以御選唐宋詩醇、文醇、爲最精粹。且其書簡約易購。能得原本五色評點者、尤爲目。此外、文以國朝姚鼐古文辭類纂最爲善本。爲其體例分明、評點精妙、校讐詳審。於此道求深者、古文苑、唐文粹、宜讀。宋元明至國朝、似此名目選本、各有一部。餘力博涉可也。詩選自唐及今、或各標一派、或各選一體、或求多取備。名目實繁、未爲定衡道義。惟郭茂愷樂府詩集、源流具在。全唐詩錄、宋詩鈔、尚不繁重、亦無偏畸。再思其次、則采菽堂古詩選、坊行五詩別裁、雖有科臼、然平正不入惡道。唐明國朝沈選、宋元張選、且寒士易購、可爲學詩津梁。若欲以詩文名家、總宜博覽。徒侍選本無益也。

姚選版本、見存京師。江南繙刻、若不易得、亦宜就各選本中、視其篇幅稍多、而又多有博大文字者讀之。如古文雅正、續古文雅正、唐宋十大家、元明十大家、儲選七種、古文眉詮之類。林西仲選本不好。若觀止釋義、太陋。不足用。

【書き下し】

後世の詩文の選本を読むには宜しく善なる者を選ぶべし。

選本は『御選唐宋詩醇』『文醇』を以て最も精粹と爲す。且つ其の書は簡約にして購ひ易し。能く原本五色評點なる者を得れば、尤も目を驚く。此の外、文は國朝の姚鼐『古文辭類纂』を以て最も善本と爲す。其の體例分明、評點精妙、校讐詳審なるが爲なり。此の道に於て深きを求むる者は、『古文苑』『唐文粹』宜しく讀むべし。宋元明より國朝に至るまで、此れに似たる名目の選本、各おのの一部有り。餘は力めて博渉して可なり。詩選は唐

より今に及ぶまで、或いは各おの一派を標し、或いは各おの一體を選び、或いは多きを求め備はれるを取る。名目實に繁く、未だ定衡の道義と爲さず。惟だ郭茂倩の『樂府詩集』は源流具さに在り。『全唐詩錄』『宋詩鈔』は尚ほ繁重ならず、亦偏畸無し。再び其の次を思へば、則ち『采菽堂古詩選』坊行の『五詩別裁』は、科臼有りと雖も、然れども平正にして惡道に入らず。唐明國朝は沈選、宋元は張導、且つ寒士も購ひ易く、詩を學ぶの津梁と爲す可し。若し詩文を以て家に名づけんと欲すれば、總て宜しく博覽すべし。徒らに選本に恃むは益無きなり。姚選の版本は京師に見存す。江南にて續刻す。若し得易からざれば、亦宜しく各選本中に就き、其の篇幅稍や多く、又多く博大の文字有る者を視て之を讀むべし。『古文雅正』『續古文雅正』『唐宋十大家』『元明十大家』『備選七種』『古文眉詮』の如きの類。林西仲選本は好からず。『觀止釋義』の若きは、太だ陋なり。用ふるに足らず。

【通釈】

後世の詩文の選本を読むには善本を選ばなければならない。

選本では『御選唐宋詩醇』『御選唐宋文粹』がもつとも精密で純粹である。なおかつこの書は簡約で購入しやすい。殿本五色評點本を手に入れることができれば、とりわけ目をみはらされる。このほか、文では清朝の姚鼐の『古文辭類纂』がもつとも善本である。体例がわかりやすく、評点が正確、校勘がゆきとどいているからである。この道で一流になろうと思うものは、『古文苑』『唐文粹』『唐文粹』を讀まなければならない。宋元明から清朝まで、これに似た名の選本がそれぞれ一部ある。のこりはできるだけひろく見るだけでよい。唐から現在までの詩の選本は、それぞれ一派を標榜したり、それぞれ一体を選ぶだけであつたり、たくさん集めて完備しようとしたりする。名目は実に繁雑で、まだ定まった道義(?)とはなっていない。ただ郭茂倩の『樂府詩集』は源流がよく具備している。『全唐詩錄』『宋詩鈔』はあまり大部ではなく、偏りもない。さらにその次を考えると、『采菽堂古詩選』坊行の『五詩別裁』は、型にはまっではないけれども、よく整い惡道に陥っていない。唐・明・清朝は沈選の選、宋・元は張景

星の選、なおかつ貧しい学生も購入しやすく、詩を學ぶものの道しるべにするがよい。もし詩文で專家となろうと思えば、すべて博覽しなければならない。ただ選本だけにたよるのは無益である。

姚鼐選本の版本は京師に現存する。江南で續刻する。もし手に入れにくければ、各選本のうち、篇幅がやや多く、内容が豊富なものを探して讀みなさい。『古文雅正』『續古文雅正』『唐宋十大家』『元明十大家』『備選七種』『古文眉詮』などの類。林西仲選本はよくない。『觀止釋義』などは、とても卑俗である。利用するに値しない。

【書目答問】

- ・御選唐宋文粹五十八卷。乾隆三年。内府大字本、廣州重刻大字本。
- ・御選唐宋詩醇四十七卷。乾隆十五年。内府本、廣州重刻本。
- ・古文辭類纂四十八卷。姚鼐編。興縣康氏刻小字本、又大字本、蘇州局翻康本。
- ・古文苑二十一卷。宋章樵注。明成化壬寅刻本、守山閣校本、又岱南閣本九卷、無注。

- ・唐文粹一百卷。宋姚鉉編。顧廣圻校刻大字本、明晉藩刻本、又明刻小字本。
- ・唐文粹補遺二十六卷。郭麐編。刻本。
- ・樂府詩集一百卷。宋郭茂倩編。乾隆刻本、武昌局本。明梅鼎祚編古樂苑五十二卷、又補郭選。
- ・全唐詩錄一百卷。徐俎編。通行本。
- ・宋詩鈔一百六卷。吳之振編。通行本。
- ・采菽堂古詩選三十八卷、補遺四卷。陳祚明編。通行本。
- ・五朝詩別裁集、唐三十二卷、明十二卷、國朝三十六卷、長洲沈德潛編、宋八卷、元八卷、華亭姚培謙編。沈選可便初學、姚選未善。【補正】
- ・古文雅正十四卷。蔡世遠編。
- ・續古文雅正十四卷。林有席編。
- ・唐宋十大家文集五十一卷。儲欣編。八家外、增李翱、孫樵。明茅坤八大家文

鈔、鍾惺八大家文選、旨趣略同。
・元明十大家文集 卷。國朝人編。

（続）